

鹿野忠雄の学問の展開過程から学ぶ「移動」と帝国日本  
——台湾から東南アジアまで——

全 京 秀\*

(金良淑\*\* 訳)

Kano Tadao, the Anthropologist under Imperial Japan:  
From Taiwan to Southeast Asia

CHUN Kyung-soo\*

(KIM Yangsook\*\* trans.)

I 序論——泉靖一が憧憬していた人物

ちょうど「戦後70年」が過ぎた現在、今年(2016年)は鹿野忠雄(以下、鹿野。特別な場合にはフルネームで記載する)の誕生110周年となる年でもある。彼の誕生100周年にこのような作業を完了させられなかった点について反省しつつ、110周年に際して、鹿野の業績に人類学の分野から光を当てる作業の意義を見出したい。この作業は、反省を込めて学者個人の業績を称えるだけではなく、日本人類学史の定立に必須要件として寄与できるものである。戦後70年と日本人類学史という二つの枠組みが絡み合いながら織りなすことのできる最も大きなイシューの一つが、鹿野忠雄という学者の「行方不明」という現象の解明と、彼の業績に対する十分な評価である。鹿野の業績への評価は、日本人類学史の整理において特別な意味を持っている。また、個人史という側面においては、彼の死亡にまつわる問題が、戦後処理という非常に大きな問題と関連があると考えられる。この問題を回避することは、

\* 貴州大学: Guizhou University, Huaxi, Guiyang, Guizhou, People's Republic of China / korancks@hotmail.com

\*\* 立教大学ランゲージセンター; Rikkyo University Language Center, 3-34-1, Nishi-Ikebukuro, Toshima, Tokyo 171-8501, Japan / yangsook@rikkyo.ac.jp

※ 本論文においては、参考文献の出版年月日までを示しているが、これは、一年に多数の論考を発表する鹿野忠雄の研究の軌跡をたどるために必要であると判断し、著者の表記方式のままに掲載することにしたものである(『白山人類学』編集委員会)。

日本人類学史の整理を放棄することと同じであろう。戦後処理の問題と日本人類学史を一つの枠組みの中で整理しなければ、日本人類学史は説明不在のブラックボックスという断層を創出することになり、それは日本における人類学という学問の土着化や未来化という問題にとって、歴史的な障害物として作用するだろうと思われる。

本稿が追求する基本精神は二つある。一つは、日本人類学史を整理するための基礎的な一角を担うということ。日本では、様々な学問分野の学史に関連した研究書が相当数出版されている。しかし、文化人類学（民族学）分野では、「学史」を名乗る研究及び出版された書籍の登場はごく最近で、ここ10年余りのことである。他の分野に比べると、その歴史は非常に日が浅い。その理由が何であれ、こういった作業が必要であり、それを達成するためには人類学の分野に従事していた研究者個人に対する深度ある評伝作業が要求される。もう一つの精神は、日本人類学界や学者のための倫理綱領（code of ethic）に関する問題意識を喚起し、高めることである。鹿野の業績や、学問活動から学習された経験は、人類学という学問の倫理問題について深く考えさせてくれる。なお、人類学者としての職業意識と直結する倫理綱領の制定は、国際的な人類学関係の学界と共同歩調を取って進められる必要がある。

「一九四五（昭和二〇）年夏、戦時下の北ボルネオにて不幸にも消息を絶ち、帰らざる悲劇の人となった。苛酷な戦争の犠牲となったのであった……学界の損失は大きかったと言わざるをえない」[山崎 1988: 354]。鹿野は、戦争時の“MIA”（missing in action）の事例であるわけだが、北ボルネオにおいて1945年7月15日付けで「行方不明」になったという単語一つが繰り返し論じられるだけで、それに関して後続する“ACTION”は何もなかった。もちろん、敗戦という状況下で、海外からの民間人引揚げや敗戦地からの軍人の復員に重きを置くため、行方不明者に対する関心は後回しにする外なかったのだろう。鹿野の場合も例外ではなかった。しかし、鹿野の行方不明に関する問題について、なぜ日本人類学界、あるいはその他の学界で調査委員会を構成しなかったのだろうか？ 約束でもしたように、全体が至極消極的だった理由は何であろうか？ 今からでも調査委員会を構成すべきだと思う。人類学における戦後処理が、どうなっているのかという問題を想起させる必要がある。帝国日本の戦時人類学は、敗戦と共に忘れられてしまったということが無きにしも非ずである。今では、記憶の断片が徐々に小さく少なくなり、曖昧になっている。それにもかかわらず、考古学者が遺物を発掘し文化の復元を試みるように、細密に資料を収集、整理して分析する作業が必要である。なぜなら、未来を準備できる唯一の作業が、過去という鏡に向き合うことだからである。

筆者は1997年の夏、国立民族学博物館の図書室の片隅に、「泉靖一」と書かれた箱が積まれているのを見た。段ボール箱はすべて郵送用に使用されたものであり、発送者は大給近達となっていた。「旧植民地朝鮮」出身の私は、京城帝国大学（以下、城大）出身で、城大の助

教授職を最後に本国に引揚げた文化人類学者泉靖一に関する資料を収集していた。全部で13個の箱に入った資料を開いてみると、泉の資料の中から、「鹿野忠雄」という名前が書かれた日記帳をはじめとして、各種論文が相当量発見された。私は「鹿野忠雄」という名前に初めて触れ、その時から鹿野に関心を集中させ始めた。その理由は簡単である。なぜ、泉が鹿野の資料を大量に保管していたのか、という疑問が生じたからである。すぐに、綾部恒雄編『文化人類学群像』（第3巻：日本編）に鹿野に関する文章が一編掲載されているのを見つけた。その後も鹿野は、私の「東アジア人類学史」研究において重要な位置を占めるようになった。鹿野は1906年生まれで、泉より9歳も年上だった。泉は、ずっと朝鮮をバックグラウンドとして城大で修学しながら大陸を中心にフィールドワークをした人物であった。鹿野は台北高等学校出身で東京帝大を卒業し、主に台湾でフィールドワークをした人物であったため、二人の出会いはまったく叶わない状況であったことがわかった。かろうじて、1936年に発刊された山岳雑誌の目次に、二人の名前が並んで掲載されているのを発見できた。その外にはいかなる場合であっても、二人は面識さえなかったということがわかった。

2003年9月から1年間、私は伊藤巫人先生の御厚意と日韓文化交流基金の後援により、東大の文化人類学研究室で研究生活を送る機会を得た。訪問初日、伊藤先生から駒場校舎14号館4階の文化人類学研究室の案内を受けた。事務室の坂本さんに挨拶し、図書室も見学した。そして、翌週から大学院生のゼミが行われるという部屋に案内された。入口の方の壁の上段には、杉浦健一をはじめ錚々たる歴代の教授の写真がかかっており、三面の壁は本棚だった。本棚の中を覗いた瞬間、私は息が止まるかと思った。その本棚の中は、「鹿野忠雄」あるいは「鹿野」の名前が記された資料でいっぱいだった。伊藤先生も、そこに何が入っているのか御存知なかったとおっしゃった。本棚の鍵を持って来てその資料を開くと、鹿野の名前で発表された論文の抜き刷りや、鹿野に関連する資料であった。伊藤先生のお話によると、これらは本郷の研究室時代からあったもので、1971年に文化人類学研究室が駒場に引っ越すときに一緒に運んで来たという。『鹿野抜刷』と書かれ製本されたものが34冊あり、21巻までは赤い装丁で、残りは黒い装丁であった。前半はほとんどが英語の他人の文章が多く、*National Geographic Magazine* から抜粋したものも相当あった。内容は、ほとんどが太平洋や東南アジアの島嶼部に関するものである。後半はほとんど日本語のものであった。そのうちの多くが鹿野の論文であり、誰かに贈呈した抜き刷りで構成されていた。26巻と27巻に、集中して自身の地理学的な論文の抜き刷りがある。したがって、これらの元々の所有者は鹿野であることは間違いない。

その年の12月には、304号室の所謂「アンデス研究室」（文化人類学標本資料室）でも、鹿野の名前が記された4個の箱を発見した。一つは台湾産と思われる箱であり、葦で作られた籠を布で覆って作られたものであり、他の三つは段ボール箱である。三つの箱の中には、

映画紹介のシナリオが書かれたもの、小さく薄い雑誌、歌舞伎のパフレット、昆虫の絵、魚拓、拓本の道具、ガラス乾板の写真、動物学の雑誌と地学雑誌の論文、懐中電灯、1927年頃の郵便ハガキ（絵は台湾の風景）、読書カード、手書きのタイやベトナム、台湾の地図などがあった。また、太平洋協会調査局発行のガリ版刷りの「北ボルネオの原始農業」（1944年3月）という題の17ページの冊子（原著者はH. Ling Rothであり、*The Natives of Sarawak and British North Borneo*, vol. IIの一部を翻訳したもの）と20ページの日本民族学会附属博物館陳列品目録（1939年5月、東京市外保谷村下保谷一三二番地）、1933年8月に台湾阿里山で採集した齧歯類動物（コウモリ）の剥製標本、伊江島と書かれた貝の化石とRaboranと書かれた石器もあった。台湾産の竹笛、甕の口縁部、鉛筆、スケッチブック、アルバム、写真、油絵1点（海辺の原住民家屋や海や山を薄い木の板に描いたもの）も出てきた。さらに、一つの箱からは名刺315枚が出てきた。名刺に記された名前を見ると、警察官245名（74.6%）、一般人38名、台湾総督府官吏10名、陸軍参謀本部陸地測量部員4名、地方庁官吏4名、訓導3名、公医3名、校長1名、台湾日日新報社花蓮港支局長1名、朝鮮総督府官吏1名などである。警察官の名刺が多く保管されているのは、鹿野の蕃地出入に関連するものと思われる。自分の名刺5枚には、所属の異なる4種類があった（東京帝国大学理学部地理学教室、警務局警務課兼理蕃課嘱託、日本山岳会会員、東京市淀橋町字柏木三四八番地二）。台湾産の箱から出てきた物の中には、ドイツとその周辺部を描いた紙の地図があり、この地図の左端に「三年 鹿野正代」という名前が書かれていた。三男二女の長男である鹿野の「二人目の妹正代は相澤氏と結婚……」[山崎 1992:24] したという記述の名前と一致するため、この箱の物品が鹿野の持ち物であるというもう一つの証拠になる。このラベルは、西澤弘恵先生が1996年に書いたものである。鹿野に関連する全ての物は元々本郷にあり、駒場の1号館に移動してから、2号館を経て1996年に14号館に移されている。

誰も関心を向けなかった物が、全て鹿野と直接関連するものであるという点に大きな衝撃を受けた。ところで、なぜ鹿野の持ち物が東大の文化人類学研究室に長い間置かれていたのだろうか？ 鹿野は東大の文化人類学研究室ができる前に「行方不明」になった人物であるだけでなく、彼は東大の地理学教室出身であったため、誰かが意図的に鹿野の持ち物を文化人類学研究室に保管したに違いない。

私は、その「犯人」は泉靖一だと踏んだ。国立民族学博物館の図書室に保管されている泉の箱の中にある鹿野の持ち物と、駒場の文化人類学研究室の本棚の中の鹿野の持ち物、そして「アンデス研究室」の物品は、元々一つのパッケージだったはずだ。文化人類学研究室が本郷にあった当時、泉靖一は何らかのルートを通じて鹿野の持ち物一切を一度に取得したようだ。その後、どんな理由からかは不明だが、泉は鹿野の持ち物の一部を自分の研究室に移したのだろう。泉は鹿野に関する資料の整理を準備していたと思われる。1970年11月15日、

泉が急逝した後、泉の本郷の研究室にあった持ち物が全て国立民族学博物館の開館準備チームに郵送されたが、その時鹿野の持ち物の一部と一緒に移動したものである。1971年初め、文化人類学研究室が駒場に引っ越した後、鹿野の持ち物のうち書籍類や論文類は4階のゼミ室の本棚に入庫し、新聞スクラップ類や土器類（紅頭嶼のヤミ族から手に入れた物）は3階の「アンデス研究室」に保管された。そのため、泉が最初に鹿野の持ち物を入手した当時のように、全て一カ所にある方が良いという意見から、伊藤先生は14号館4階ゼミ室にあった鹿野の持ち物を、その後全て国立民族学博物館へ送ったそうである。



写真1 駒場14号館304号「アンデス研究室」に保管された箱から出てきた鹿野忠雄の新聞スクラップ



写真2 駒場14号館304号「アンデス研究室」に保管された箱から出てきた土器類。これらの土器は、埋められていたものを発掘した出土品ではない。右側の箱にある、銃器を携帯し警察帽を着用した姿の人形の土器から、このことは明らかである。鹿野が紅頭嶼（船の形態から推定可能）を訪問した当時にも、紅頭嶼のヤミたちは、土製の人形を製作していたことがわかる（鹿野 1941.1.25:41-49 参照）。

しかし、泉が鹿野の持ち物を入手することになった理由や経緯については、わからなかった。その後私は、年配の人類学関係の学者に会えば過去のことを尋ねるのが習慣となり、この件についても様々な方に質問をした。そしてついに、台北で出会った台湾大学の宋文薰先生から意外な答えを聞いた。「簡単なことさ。泉先生が鹿野の遺族から買ったんだ。泉先生から直接聞いたよ」。その理由はわからなかったが、経緯については一抹の解答を得ることができた。このような話を泉先生のご子息である泉拓良教授に伝え、コメントを求めた。すると、60年代まで借家に住むほどだったため、泉の資金で購入することはできなかつただろうとのことだった。ところで、東大の文化人類学研究室には図書室があり、相当量の図書が研究室の初代教授であった故杉浦健一氏の夫人（「杉浦須子」という名前が図書番号に記されている書籍がある）から寄贈されたものとなっている。寄贈という形式を取っているが、実際は購入したものだという。その過程は、泉靖一が中心となって行ったという。泉が鹿野の持ち物を入手した経緯も似たような経路だろうと推測できる。篤志家らに協力を求めて問題を解決するという泉特有のやり方があったのだろう。実際には購入という形式で遺族を助け、名分としては書籍や遺品を遺産として残すやり方である。

## II 鹿野学の再発見

生物学や地理学をバックグラウンドとして、鹿野は多様な分野に好奇心を持っていた。「六個博士号」（写真3）という表記からもわかるように、彼は昆虫や鳥、そして氷河や魚に至るまで関心を披瀝しており、地理的にはシベリアからポリネシアに至る広域を対象として学問を展開した。彼が東大地理学科出身にもかかわらず、台湾の原住民タイヤル族の服装をし、「動物学大教室」で「野蕃学」の講演をする姿が異色である（写真3）。動物学や地理学の境界を往来しながら自然科学の多様な分野に業績を残した点についても、今後より詳細な分析が求められる。既に彼の昆虫学や生物地理学に関する業績については何度も言及されているため、本稿では彼が披瀝していた人類学分野に限定し、議論したいと思う。

日本国内で現在まで提示された鹿野に対する評価は、かなり断片的な水準でいくつかあるのみであり [大林・山田 1966; 小川 1966; 國分 1986; 山崎 1988; 1992]、人類学分野の内容について、まだきちんとした評価が行われていないのが実情である。最初のものは山崎柄根が作成した簡単な評伝 [山崎 1974] であり、次は台北高等学校の後輩である國分が作成した論考 [國分 1986] である。その他、昆虫学的な立場から整理された山崎の評伝2編がある。一つは論文の形式で [山崎 1988]、もう一つは著書の形式 [山崎 1992] を取っている。前者は「著名な日本の人類学者二人を取り上げ、「人と学問」を解説したもの」 [綾部編 1988: 1] である『文化人類学群像3 日本編』（以下、『群像』）に収録されたものである。しかし、自

然史に主な関心を持って整理した山崎の文章は、人類学的な立場から整理されたものなど言うにはかなり物足りない。山崎が鹿野について書いた内容を、『群像』に掲載された他のものと比べると、果たして鹿野と言う人物が22名の代表的な人類学者に含まれるのだろうか、という疑問が生じる。つまり、22人の「著名な」人類学者の名簿に鹿野を選定したのは、この本の編集者である人類学者（綾部恒雄）のバランスの取れた視点が反映されたものであり、鹿野に関する評伝作業を担った人物（山崎柄根）は、専攻分野の違いによって人類学的な光を当てることはできなかったようである。個別の評伝作業の手抜きに対する批判や反省のない状態で後続する学史の作業が進められたことで、鹿野に対する理解は希釈されたものと思われる。「高砂族諸族の文化史的な位置づけは著しく鮮明の度を

加えたばかりでなく、東南アジア民族学にも多くの重要な問題と結論が提出された」[大林・山田 1966: 4] という評価に続き、1988年の『文化人類学群像』の一人として登壇した鹿野は、日本人類学史における22分の1という位置を占めたと同時に、台湾研究者6人のうちの1人という身分になった。しかし、この十数年の間に日本の学界にいかなる変化があつて、1966年及び1988年における鹿野に対する認識が、次第に消えてしまったのだろうか？

主な理由は、『群像』という次元を超えて、学史を整理する観点や方法に起因すると考えられる。観点の次元の議論は、二つに要約できる。一つは、戦後の世代交代による現象であり、戦争を見つめる視点の変化が反映されたことを意味する。戦後70年が過ぎ、日本社会の主流は戦後世代に移った。それによって、直接的な戦争経験から距離を置いた新しい世代の登場に注目するようになる。戦争を見つめる学問的な目にも変化が生じるのは必然であり、戦後世代中心に、過去を見つめる眼差しや過去の出来事に対する認識の変化を感知できる。このように、日本人類学史を考察するにあたって、戦争との関連性を考慮する観点が弱くなっている点を指摘したい。観点に起因する二つ目の問題は、マルチサイトッド・エスノグラフィー（multi-sited ethnography）に対する認識が微弱な学界の背景を指摘できる。現在、日本人類学界の主な傾向を反映する所謂地域専門家が、一つの地域についてだけ没頭することによつ

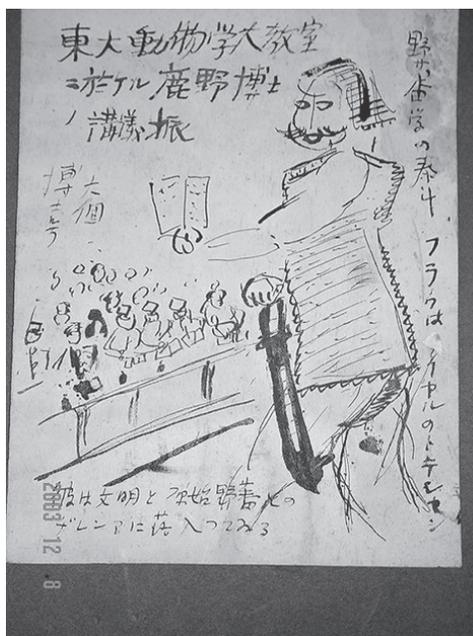


写真3 駒場14号館「アンデス研究室」に保管されていた鹿野の講演姿が描かれた色紙。1941～44年の間と考えられる。

て、様々な場所（複所）に対する同時的な関心の展開が抜け落ちてしまうという問題である。主題という側面においても、空間という側面においても、絶え間なく視点を移動させながら自分の学問領域を拡大させ、深化させた結果として生じた鹿野学が、固定され範囲の狭い視野を持った専門家たちの視線の射程圏内に収まり切らないという問題がある。また、方法の次元においても、明らかな変化を見せていることが指摘できる。山路が指摘したように [山路 2011.8.20: 38]、何か特定の派閥に属さず、主に一人で活動していた学者に対する認識に問題が発生している。学史という枠組みを考えるにあたって、研究者は目立ち易く制度化された派閥、すなわち学派をまず念頭に置き、特定の派閥に属するのが困難な立場をなおざりに扱う傾向が出ているようだ。『群像』の作業が、より一層緻密に整理、穿鑿され、群像間のクロスチェックによって当代の全体的な活動像を描き出そうとする努力が微弱な状態で、学派や主要プロジェクトを中心に学史を整理する試みの台頭により、「囑託」という身分で、複数の場所において活動していた学者の業績に対する関心を欠く傾向が強くなったのである。

鹿野の人類学は、何か特定の学派傾向に属することのできない独学的な立場である。言い換えれば、当時の帝国日本内では、彼の学問的背景や器を満たせる学問的組織が存在しなかったとすることが可能である。彼が昆虫学を中心とした生物地理学を専攻していたという点が大きく作用したようである。したがって、彼の経歴からは、大学の教室や学会の核心的な集団などにより構成が可能な師弟関係が明確に現れて来ない。台湾総督府や拓殖協会の囑託に始まり、陸軍の囑託へと続く囑託という身分が、彼が活動していた公式の肩書きの全てであった。例えば、鹿野は台湾総督府警務局警務課の囑託として月給 70 円を受け取っており、理蕃課の囑託も兼務していた [台湾総督府編 1936: 146-148]。囑託という職責は、特定の政策的課題を遂行するための一回性のものに過ぎない。植民地政府と戦争遂行中の軍から賦課された政策課題の遂行という任務が、社会的関係のネットワークを構築できるバックグラウンドを提供するのは困難である。「(鹿野は:筆者追加)一回も定職を持ったことのない人でした。しかしイタリア・ルネッサンス期のような、すごいパトロンがいたのです。それは渋沢敬三先生」 [安溪・平川編 2006.3.16: 241] であったため、出版状況が極度に困難であった時期の敗戦直前や直後にもかかわらず、鹿野が行方不明になった状態で、鹿野の人類学的業績を単行本として出版することができた。学派傾向という次元で彼の活動や業績を眺めるならば、彼は徹底して一匹狼であった。もし彼と個人的に格別な関係を維持していた学問的同伴者を選べというなら、私は 3 人を挙げる。國分直一とオトリー・ベイヤー (Otley Beyer)、そして金子總平である。前者の 2 人は、鹿野の足跡について陳述し、貴重な記録を残した。後者は、共に北ボルネオで最後の足跡を残した。鹿野と金子は、互いの「行方不明」を証言できる唯一の相互目撃者である。彼らの行方不明は、個人ではなく学者 2 人という「集団」であることを重く受け止めなくてはならない。彼らの共同作品は、未完成のまま残された状態である。

未完成という現象は、完成に向けて進めなくてはならないというプロセスの問題を抱えている。そのプロセスは、後学らに残された宿題であり、遺産として認識されることを望む。また、それが日本人類学史のための真の鏡の役割を果たせるものと期待される。

鹿野が示した人類学的業績のプロセスや成果を、学問的傾向として理解した場合、彼の学問は、「フィールド・サイエンス」(field science)であると要約されている。例えば、「台湾における昆虫学、動物学、生物地理学、自然地理学などの台湾の自然史、また高砂族としてまとめられる台湾原住諸種族の民族誌、先史学など文化人類学あるいは民族学などの、すなわち台湾におけるフィールド・サイエンスの発展におけるある一断面が見えてくるように思われ」[山崎 1992: 19]、その10年後に書かれた文章でも、「鹿野はフィールド・サイエンスという一つの専門分野を創出したといっても過言ではないであろう」[野林 2001.2.18: 59]と評されたように、同語反復のレベルである。鹿野は昆虫学に対する関心から、登攀しながら台湾の原住民に出会い、落島である紅頭嶼のヤミ族と生活する経験を元に、人類学的な関心を持つようになった。つまり、人類学に対する鹿野の入門経緯は、フィールドワーク(fieldwork)であるという点に注目すべきである。フィールドワーカーである彼にとって、人類学という学問は、彼自身がフィールドで出会ったフィールド・サイエンスの現象の一つであり、人間や文化に対する関心であると言える。フィールド・サイエンスという用語自体が聞きなれず、きちんと定義されていない状況で、鹿野の業績をフィールド・サイエンスの一つだと規定するには、プロ(pro)とコン(con)の二つの側面があり得る。「プロ」に該当する面は、鹿野の学問的傾向が示してくれる獨創性だと言える。フィールド・サイエンスという用語が適用される学者が珍しいという点を考慮するならば、フィールド・サイエンスを遂行した鹿野に対する評価は、正当であると受け止めることができる。「コン」の側面とは、彼のフィールド・サイエンスが、既存の学問傾向が提供する基盤に無賃乗車できないことによって発生する弱点を指す。山崎から野林に至るまで、同様に変わりなく指摘していることが、鹿野の「フィールド・サイエンス」に対する貢献である。彼らは鹿野の学問的アイデンティティーをフィールド・サイエンスに見出そうとしているようだが、フィールド・サイエンスが何であるのかという説明をしない状態で、鹿野の学問的アイデンティティーをフィールド・サイエンスだとするなら、結果的に鹿野の学問的アイデンティティーは模倣な状態で残らざるを得ない。最低限、フィールド・サイエンスに対する認識論上の問題提起が先行されなければならない。鹿野が遂行していた「フィールド・サイエンス」は、構成要素間の「関係」を論証するための、資料収集の手段として意味を持つものであり、「フィールド・サイエンス」それ自体が目的ではない。現在に至るまでの鹿野に対する議論は、具体性や核心を把握する努力が足りなかったと思う。それらは、鹿野が書いた文章から自明に立ち現れて来ると考えられる。この部分を明快に説明することが現在の課題であり、その作業のために、具体的

鹿野の文章を詳細にチェックする必要がある。

この10数年間、学史という枠組みの中で日本人類学に光が当てられ、いくつかの重厚な業績が発刊された。代表的なものを出版された時期を基準とし、順番に記すと、坂野徹著『帝国日本の人類学』[2005]、山路勝彦編『日本の人類学』[2011.8.20]、中生勝美著『近代日本の人類学史』[2016.3.20]などがある。ところが、この三つの業績は共通して鹿野に対して至極低い関心を示している。科学史の視点から日本人類学史の整理に挑戦した坂野徹は、鹿野忠雄の名前を全く登場させなかった。台北帝国大学の業績分析に集中した中生は、登山に関連して鹿野に言及し[中生 2016.3.20: 508]、700ページを超える膨大な山路の作業の中にも「鹿野忠雄や小泉鉄など……彼らは、集団生活を嫌い、権威を嫌い、国家権力を嫌うという傍若無人の連中」[山路 2011.8.20: 38]、「総督府囑託を務めた生物学が専門の鹿野忠雄」[宮岡 2011.8.20: 86]といった程度の簡略な記述がなされただけである。つまり、学史という枠組みから日本人類学（民族学を含む）を整理した結果が示した鹿野と彼の業績に対する関心は、意外と疎略なものであった。このような帰結の主な理由は、学史を整理するアイデアの基本が、植民地の帝国大学別の区分や大型プロジェクト別に分類され、個人的に活動していた学者の業績がきちんと評価される機会が少なくなったためだと思われる。すなわち、制度中心の学史整理が試みられ、制度圏内に含まれなかった学者に対しては、相対的になおざりになった結果である学史という通時的観点が、一つの問題として指摘できる。この問題は、学史から疎外された結果、鹿野が日本人類学史の主流から除外されるという現象を招いただけでなく、もう一步進んで、既に制度や体制の犠牲になるという経験をした個人を、学史という枠組みから再び犠牲にする結果に至ったのである。本稿は、このような問題点を指摘し、制度中心の学史整理に対する反論の意図を持って執筆されたものである。正当な根拠や理由も提示されない状態で、過去の制度が疎外した鹿野を、現在の学史の作業が再び繰り返して疎外することは、不公平を乗り越して無関心によるものとしか言えない。日本人類学史の枠組みの中で、無関心の対象として編入されてゆく鹿野を黙って見ているわけにはいかない。制度がまともに後押しできなかつたという事実が明らかになだけに、個人史中心の鹿野学は、一層の意味を付与されねばならない。「帝国日本」あるいは「近代日本」の人類学という枠組みにおける鹿野の位置は、明確な座標を見つけねばならないし、鹿野学の座標設定は、日本人類学史上、重点的な課題の一つとして見なされるのが適当である。ヤミ族に関する英文版の図譜の共著者である瀬川は、“Dr. Kano, the co-author, disappeared in North Borneo in July 1945 while engaged in ethnological field-work and has not been heard from since” [Segawa 1956.11.5: v] と記した。この本の主著者は鹿野であるため、鹿野について“the co-author”ではなく、“the first author”と表記することで、発生可能な誤解を予防することができたはずである。このような些細な問題まで、詳らかに元の位置に戻れるように、鹿

野の座標を整える作業が必要である。

ところで、一つ奇異に感じる点がある。敗戦した日本においては、戦後処理の最優先の国家的課題として、引揚げと復員が進められていた。またその時期に、台湾では「二・二八事件」(1947年2月28日)が勃発し、戒厳令(1949年5月20日公布)中であった。かなりの期間、民族学に関する研究調査は、政治的に困難な状況に直面した。当時台北帝大の特色であった南方史や南方土俗に関する研究は、日本の南方侵略に関連するものとして一斉に禁止され、南方重点主義も禁止された[宮本 1949: 117]。南方関係資料は、厳重に保管され、利用率はごく僅かとなった。原住民研究機構が再発したの、1949年8月、台湾大学考古人類学系の成立が契機であり、李濟(1896-1979)が系主任であった[宋 1952:1]。このような緊迫した状況下で、鹿野の人類学的研究作業や成果に対する関心が、終戦直後の台湾と日本の両方で出版物として世に出たことに注目したい。鹿野の著書(1946年に東京で出版されたもの)は、台湾では「鹿野忠雄著『東南亞細亞民族學先史學研究 I』」という題で、4回に分けて『台湾風土』という雑誌で紹介された[宋 1950.1.24; 1950.2.6; 1950.2.27; 1950.3.6]。苛酷な戦争から生き残った人々が、鹿野の出版物を通して何を得ようとしていたのか考えてみることは、非常に興味深い問題である。

論文や著書などに代表される出版物という現象は、該当する著者に対する社会的認識の共有と褒貶、そして著者の学問的功績に対する再発見の意味を持っている。植民地の清算や国家建設の緊迫した課題を前にした戦後の台湾と、連合軍による占領や戦後処理の重大な課題が進行中であった状況の中の日本において、鹿野忠雄の再発見が意味するものは何であろうか? 当事者(鹿野)は、「行方不明」になった状態で、戦禍から生き残った人々が彼の声を聴こうとし、彼の声を代弁したということを実証するのが、台湾や日本で40年代末や50年代初めに鹿野の名前で出版された出版物である。侵略戦争の擁護や扇動をしていた出版物が消えた紙面に登場した「鹿野忠雄」という名前が象徴する意味を、再び考える必要がある。戦犯として烙印を押され、隠れるのに汲々としていた知識人らの立場とは明らかに区別される鹿野に対する社会的評価が、戦後の台湾や日本で、同時に作動していたということは明らかである。大東亜共栄圏の暴圧的な号令が消えた思想的な混乱という状況で登場した「鹿野忠雄」という名前が持つ意味について、考えてみたい。

鹿野本人は、北ボルネオの密林で「行方不明」状態の間に、大陸から移住して来た外省人を中心に新たな局面が整いつつあった台湾で、過去に鹿野の名前で出版されていた論文が翻訳され、持続的に出版されるという状況は、どのように説明されるべきだろうか? GHQの占領軍統治下、日本で鹿野の論文が収集され、単行本の業績として出版され、英文で作成した華麗な洋装本で出版される状況は、どのように説明されるべきだろうか? 普通、出版物が上梓されるプロセスは、著者の直接的な行動を中心として展開される。しかし、終戦直

後の台湾や日本において、「鹿野忠雄」の名前で発行された出版物は、全て鹿野の直接的行動とは関係のない展開の結果だったことが注目される。つまり、それらの出版物は、著者である鹿野が排除された状態で行われたものであった。何がそのようなプロセスを可能にさせたのか？ どのような力がそのプロセスに作用したのか？ 具体的にそれを主導していた対象を指し示すことは、容易ではない。しかし、そのような結果を生み出したことは、当時の時代的要請だったと言える。物質的に窮乏し、精神的に荒廃していた終戦直後の時代が要請したのが鹿野の文章であり、「鹿野再発見」のプロジェクトであったと思う。終戦直後の時代という現象は、戦時中とは完全に異なった世界を指す。完全に異なる世界で、鹿野を求めている人々が耳を傾けようとした鹿野の声は、何であっただろうか？ 戦時中に出版された鹿野の論文が、終戦直後に復活することは、一体何を意味するのだろうか？



写真4 『台湾風土』第49期に掲載された鹿野の論文(1938.9.10.「紅頭嶼ヤミ族の粟に関する農耕儀禮」、『民族學研究』4(3): 407-420.)の翻訳縮約本。陳麒(訳者)は、陳奇祿の別名である。

終戦直後の人々(台湾であれ日本であれ)が最も必要としていたのは、苛酷な戦争によって傷ついたトラウマを治癒できる「何らかの」ものであっただろう。戦争という抑圧の状況で遮断せざるを得なかった思考様式の再活性化のための出口と、原動力を見つけないとまらない状況で出会ったのが、鹿野の声だったと思われる。誰にも治癒することのできない状況が作り出したのが、自ら治癒方法を見つけることであり、その治癒のために選択されたのが鹿野の声だったと思う。私は、鹿野の声が治癒の役割を担えたと信じていた人々が、「鹿野再発見」の先鋒に立ったと考えている。「鹿野再発見」の過程で現れた出版物がその証拠であることは間違いなく、そのような証拠として登場した出版物からその内容を解釈することが、「鹿野再発見」という現象を理解する要諦であり、今私が「鹿野再発見」の発見を試みる作業の意味であると考え。なお、大東亜戦争に関連する多くの問題が、未だ進行形の状況であることを直視したい。戦後処理の不備による進行形のトラウマが持続する限り、平穏な社会を期待することは難しい。今、「鹿野再発見」の意味が復活する理由は、治癒されないトラウマに対する問題意識があるためである。それは、戦時中や終戦直後の時代を貫通する、鹿野

の声に対する期待感に起因している。本稿は、それを発見し、分析しようという目的を持っている。全く異なる二つの時代を貫通する声であるという事実が投げかける破壊力は、鹿野の声が時間移動と空間移動を経ても一貫していると信じて疑わない。状況によって左右されない一貫した鹿野の観念を読み解くことが、本稿の課題である。泉靖一が、面識もなかった鹿野の持ち物を大量に保管していたのも、以上の脈絡の中で行われたものだと考えるのが、私の立場である。

戦時中に発刊された鹿野の論文の中には、研究という仮面を被った抵抗の内容が込められている。それは、総力戦という状況の抑圧的な構図において展開が可能な「弱者の武器」である「隠抗策」(hidden transcripts) [Scott 1984] であった。つまり、研究そのものが一種の抵抗の役割を持っていたのである。研究だからと言って、全てのものが抵抗という意味を持つわけではない。ある研究は意図的に真実を隠蔽する方向に進行することもあるため、そのような研究や成果は、真実を追求しようとする人々の口にくつわを噛ませる役割を果たした。真実を掘りあげる研究が、隠抗策の役割を担う。終戦直後の台湾や日本で、鹿野の研究が紙面に再生された理由は、真実を追求していた鹿野の研究結果が、治癒効果を発揮するだろうという共感帯があったためだと考えられる。本稿は、真実を追求するために駆使していた鹿野の叙述を具体的に見つけ出すという課題を抱えている。

評伝式の整理を基礎とし、鹿野の人類学的特性に、私は二つの側面から光を当てようと思う。一つは、大林太良・山田隆治が「鹿野の研究は独創性に富み……東南アジア・オセアニア全域に及ぶ大きな文化史・民族史に関する構想に大成綜合して行くことが彼の早世によって阻まれたことは遺憾であった」[大林・山田 1966: 5] と指摘したように、彼の独創性は、昆虫や魚類及び地形などに対する緻密な資料の整理を基本とした自然科学的な側面と、人類学が出会う接点である。これは、1960年代以降、世界の人類学界に新しい人類学の分野として登場したエスノサイエンス (ethnoscience) の範疇に一致する部分でもあり、「世界で最も早いエスノ・アーケオロジーの人だったと思います」[安溪・平川編 2006: 241] と評価されている。native's point of view が備わっていないと行えないものがエスノサイエンスであり、それは分類を命としている。分類という作業を、学問の最初の段階の基本であると考えれば、鹿野はそれこそ人類学という学問の基本を実践した人である。日本人としてこのような立場を闡明した人物は柳田国男だが、彼は native's point of view を逆に適用すると同時に、観念的な状況のレトリックだけを反復しながら、自民族中心主義に陥ってしまった。日本の帝国主義化が進行する間に、人類学の分野において、具体的かつ深層的な資料収集に native's point of view を適用した唯一の人物が、鹿野忠雄である。したがって、私は彼を人類学者だと呼ぶことを躊躇わない。鹿野学の特徴は、「関係」に対する関心から出発する。昆虫や鳥、そして魚や海流といった自然地理の現象を観察した鹿野が、自然現象の中にいる人間に対して好奇

心を発動させながら、要素間の「関係」という観点が人類学へと延びて行ったことに注目したい。つまり、鹿野が人類学へ分野移動するに至った契機は、現象間の「関係」に対する関心であった。彼の先史的な研究も、究極的には発掘された物やそれを使用していた人々の関係を論証することにおいて、他の学者よりも優れていた。地理的な現象を眺める眼差しと同じである。紅頭嶼のヤミ族に対する鹿野の関心は、フィリピン北部のバシー海峡のバタンとの関係に延長されていることが、彼のマニラ生活でも確認された。彼の学問的関心の核心は、要素間の「関係」にある。現代的な表現を借りるなら、鹿野の分野移動の究極的な目標は、現象間の関係を通じたコンシリエンス (consilience) であったと考えられる。1930年代と1940年代にかけて、自然的現象や文化的現象の間関係について関心を集中させたのは、アルフレッド・クローバー (Alfred Kroeber) である。クローバーの場合は、両者の関係に対する問題提起レベルの論文を発表した。それを「文化生態学」という名前で実践した人物が、ジュリアン・スチュワード (Julian Steward) であったことを想起すると、鹿野の学問的実践は、当時のアメリカ人類学に次ぐレベルであったと言える。全世界的な地平から観察しても、これは鹿野学の独創性である。

また、もう一つは彼の学問に臨む態度であり、鹿野学の倫理観だと言える。彼がフィリピンや北ボルネオで遂行していた作業は、戦争中の占領地で生じたことであった。占領という状況下で遂行された人類学者の作業が、相当部分倫理的に問題を示していることを、私たちはよく知っている。当時、岡正雄を核とした民族研究所を中心に行われた作業や鹿野の作業が、具体的な言説の表現においてどのような差異を見せていたのかを緻密に分析するならば、私たちは鹿野学の倫理性について、新たに光を当てる基盤を用意できる。参考までに、彼が残した言説には、次のようなものがある。「民族学の使命は民族乃至種族生活の基礎構造を究め、夫等の類縁と差異を明かにすることであり、此處に政治への聯関性がある……民族学は種族乃至民族の相異性の立場から観察し、政治に對して参考資料を與へるもので、之れ以上は行き過ぎである」[鹿野 1946: 1-2]。この言説が記された論考は、敗戦前、つまり大東亜戦争中に作成された文章であることは明らかであり、鹿野の立場は確固としている。この言説は、同時代に活躍していた民族研究所の作業に対する批判とも読める。学問の政治的関連性に対する限界を具体的に言及することで、学問の倫理性を提起している。戦争という状況の中で提起されるほかない倫理問題に対する未来指向的議論の基礎が、鹿野に関する研究から発信されることがわかる。戦後日本の人類学が、岡正雄中心に新たな局面を整えることが試みられた点は、否定できない。だが、もし鹿野忠雄を中心に新たな局面が試みられていたら、その結果はどのような姿になっていただろうか。

### III 鹿野学の漂流と移動

銃で目標物を狙う射手は、固定目標と移動目標を設定できる。固定された物体よりも、移動する物体を狙うほうがはるかに難しい。したがって、固定目標を設定した射手よりも、移動目標を設定した射手の命中率が低調なのは当然である。戦後70年が経過しても、日本の人類学史をまとめる過程で鹿野が疎かに扱われる理由の一つが、この点にあると考えられる。鹿野は、一種の移動する目標物である。鹿野の名前は、一定した一つのバウンダリー内でのみ見られるものではなく、場合によってはまったく突拍子もない分野の雑誌にも登場する。このような状況に気づき、鹿野に対する暫定的な評価を下すために適用された用語が、フィールド・サイエンスであろう。フィールド・サイエンスという用語が厳密に整理されていない状況で、鹿野にこの用語を適用するのは、取りあえずの評価であるという長所もあるが、鹿野が追求していた「鹿野学」の実体を模糊なものにするという短所に帰結する。鹿野が移動していた軌跡は単純ではなく、歴史上に登場した全ての日本の人類学者をひっくるめて見ても、最も複雑であったといえる。その軌跡の複雑性をきちんと明らかにすることが、鹿野学を理解するための先行作業である。

移動という現象と類似して見えるのが、漂流だと考えられる。移動と漂流の違いは、主体の問題である。動く主体が主体の立場で動くことが移動であるならば、漂流とは、動く主体の立場とは関係なく彷徨うこと、つまり動く主体の立場が排除された状況をいう。航海中の船舶の移動と漂流の違いに関する比喻が、ここに適用できるだろう。戦後70年の日本人類学史という枠組みで見ると、鹿野は行方不明であり、鹿野学は漂流している。行方不明と漂流は、鹿野の立場や意志とは無関係である。鹿野の立場を明確に整理するためには、漂流という現象に置かれている鹿野学を、移動という現象から眺めるパラダイムの転換が必要である。鹿野の立場を具体的に把握するためには、鹿野が作成していた文章に対する綿密な分析が要求される。この分析に基づいて、鹿野の学問的な移動の軌跡を明らかにすることが、鹿野学の大綱となる。鹿野学の特徴が移動であるという点を確認し、漂流する鹿野学を日本人類学の重要な標的の一つとして設定し、鹿野の声を分析することは、日本人類学史のフレーム設定において、不可欠な作業である。帝国日本は、明確な目的を持ち移動したが、結果的に漂流した。もう少し正確に表現するならば、移動するようには見えなかった帝国日本は、事実上敗戦に帰結する漂流の動きであった。全体が漂流していた帝国日本の中で、鹿野も漂流せざるを得なかった。彼を襲った漂流の運命は、「行方不明」に帰結したが、鹿野学は明確な方向に移動していた。そして今、私たちがその移動の軌跡をつまびらかにするのを待っている。鹿野学の移動方向に関しては、断片的ではあるが、既に洪沢財団やオトリー・ベイヤー教授、そして國分直一先生が指摘している上に、イネズ・ドゥ・ボークレール (Inez de Beauclair)

博士の論文でも証言された。鹿野学が体系的に整理されなければならない理由は、東アジア人類学史という枠組みが、それを待っているからである。

本稿が追求する議論のための概念的な枠組みとして、「移動」という問題が先決される必要性があり、そのためには本稿に限定的で操作的な概念定義が要求される。移動には、3つの側面から接近できる。第一に、物理力による物体や人体の空間的な場所の移動がある。この場合の移動とは、移動の主体が必ず一つの空間（location）から別の空間へ位置を変えることで、一種の地理的な現象だといえる。空間移動を行う主体がL1からL2へ座標を変更させ、その変更の軌跡を表す場合に該当する。物理的な空間移動が、該当する主体や周辺にいかなる意味を持つのかという問題意識が、空間移動に関する議論となる。現象学上の共時態がこれに該当する。第二に、移動の主体が時間（time）による変動を見せる場合に該当する時間移動がある。ちょうど空間移動において主体の空間的座標が変わるように、時間的な座標が変わる現象を指す。これは一種の文化変動的な現象でもあり得るし、史学的な現象として接近することも可能である。時間移動を行う主体が、T1からT2に座標を変更させる場合に該当するものであり、時系列上に展開する現象や存在に関する観察がこれに該当するため、通時態の現象だといえる。厳密な意味で、日常生活の中での空間移動は必ず時間移動を前提としているが、時間移動は必ずしも空間移動を前提とはしない。第三に、観念的な現象としての視点（perspective）の移動が考えられる。前者の二つが客観的な現象であるのに比べて、第三の場合は多分に主観的な現象である。したがって、この場合は現象学的に接近することが可能であり、プログラム化された遺伝子の命令によってのみ動作するその他の動物とは異なる、人間現象の特徴である。視点移動を行う主体が、P1からP2に対象を変えることを意味し、現象学的な主体の認識によって、必然的に対象が選択される経験をすることになる。選択された対象に関する思考の拡大や縮小の場合も、視点移動の現象といえるため、仮想現実や拡張現実に関する議論も可能である。空間移動と時間移動、そして視点の移動の三者を組合せた状況が、一般に展開される日常生活における移動を意味する。生活のダイナミズムは、移動する空間と時間、そして視点の脈絡ある組み合わせによって、その意味の増幅現象が展開する。視点移動の介入の度合いによって、相互主観性の議論が可能にもなるし、極端に言えば、L1T1P1からLnTnPnへ移動する仮想現実を論じることでもできる。時間と空間が構成する客観的な座標の上で、主観的な精神現象を営為する人間という存在の視点の移動が、日常生活から仮想現実に至る世界に内在して（embedded）いることがわかる。

「帝国日本」という限られた時間と空間において展開可能な現象は、様々に提示することができる。それらの中から、鹿野忠雄という学者の活動に適した移動の概念を満足させられる研究課題を発見することは、本稿が挑戦すべき出発点上の問題意識である。その課題が、本稿が提示する仮説になるかもしれないし、本論の内容を構成するものとなる。鹿野の年譜や

業績目録などに基づいて、鹿野に関する既存の研究から抽出可能な仮説は、二つに集約できる。第一に、分野移動であり、第二に思想移動である。これが、筆者の考える鹿野学を支える二つの軸である。

鹿野の業績から読み取れる移動の軌跡の一つは、学問分野ごと (disciplinary) の関心の拡大と多角化である。昆虫への関心による生物学や生物地理学に始まり、紅頭嶼のヤミ族の台湾原住民から出発してフィリピンの先史学やボルネオの原住民にまで繋がってゆく、好奇心の追従に根ざしたものであった。学問に対する関心の出発点は、好奇心である。好奇心なくして学問をすることは、うわべに過ぎない。好奇心が移動すれば自然と関心の多角化が招来され、関心の多角化に沿ってさらに一歩進めば、自然に分野移動という現象が生じてくる。蜘蛛と蝶から始まった鹿野の好奇心は、生物地理学という分野を満足させ、その次に登場した好奇心の対象が人間であった。彼の登山活動は、学問的な好奇心を満足させるための手段として行われた。つまり、登山が鹿野の活動の目的ではない。彼を登山専門家だと評価する議論は、鹿野の真価を指摘する論点の一つだが、それが鹿野の姿の全体ではないという点を確認すべきである。登山は確かに、鹿野の学問的好奇心を満足させる不可欠な手段であったと思う。しかし、重要な論点は、彼の関心の多角化の過程において、どのような契機によって彼が人類学の分野に関心を移動させたのかということである。高校から大学に進学した当時、彼は既に人類学に関する理解を相当程度備えていた。1928年、東京帝大の経済学専攻を諦め、新たに創設された台北帝大の土俗・人種学研究室に進学していた馬淵東一の立場と比較すると、鹿野の場合、初期の関心事であった動物学から生物学を含む地理学を好んでいたことは明らかである。人類学という分野に対する鹿野の関心は副次的であり、後日、東京帝大の学生時代に人類学へと関心が拡大したと考えられる。人類学分野に対する彼の関心は、紅頭嶼のヤミ族を背景に生じている。生物地理学分野の博士課程を終えた後、専門的な学者として活動する時期である1930年代後半から、鹿野の主な関心は人類学へと拡張していったといえる。

当時の学問の傾向は、鹿野による分野移動を理解できなかったという証拠が、彼の博士学位論文に関連したエピソードである。裏を返せば、分化した学問分野の制度にうまく適応できなかったという鹿野の立場が表れてくる。東京帝大地理学科で学問を錬磨した鹿野が、京都帝大に移動して博士の学位をとったという事実は、制度的な硬直性から脱していた鹿野の行動プロセスを説明するのに十分である。このように鹿野の学問的関心は、動物学から地理学を経由して人類学へと拡大しながら、蓄積、統合されてゆく姿を示している。「臺灣最偉大的博物學者－鹿野忠雄」[呉 1996: 249]のように、「博物学」を掲げる表現も、同一の脈絡の傾向を説明するものである。したがって、鹿野学の独創性が依拠するものは、関心の多角化による分野移動であり、鹿野学は非常に現代的な意味の統合 (consilience) を志向してい

たことを否定できない。学問の細分化が主流であった当時の状況を考慮すれば、鹿野は既得権が保証された制度に適応できていなかったといえる。

また別の移動軌跡の一つは、一種の思想移動である。東京出身の鹿野が、中等教育を受けるために植民地である台湾に移動したことは、特別な意味を持っている。当時、植民地では子弟の中等教育や高等教育のために「内地」に移動することが少なくなかった。両親の勤務地転出によって子弟が「外地」に移住し教育を受けることもあったが、鹿野の場合、既に中学生の頃に東京で芽生えた昆虫に関する好奇心が、彼を台湾の台北高等学校へと導いたのである。台北高等学校の学生時代に見せた彼の生物学的な好奇心の跋扈と標本収集は、周知の事実であった。台湾という植民地で出会った紅頭嶼ヤミ族との関係から、鹿野の人類学的関心が明らかにされた。彼の人類学的関心は徹底してヒューマンズ的であり、「原住民的視点」に依拠したものであった。当時、植民地を見つめる学界の視点が徹底して他者化に依拠していた点を認識するならば、鹿野の脱他者化した眼差しは、他者化した学界の視点から学習されたものではなく、自身のヒューマンズ的思想に起因するものだったといえる。これは、とてつもない思想的な乖離現象である。植民地台湾で披瀝されていた鹿野のヒューマンズは、大東亜共栄圏のフィリピンやボルネオという占領地に移動しながらも継続していた。それは、鹿野の成長過程で芽生えた人間性の発見に依拠した思想的移動であったと考えられる。

次に、帝国における教育の主流が注入していた他者化の視点から、ヒューマンズ的な思想への移動が、当時の政治的状況といかなる摩擦を経たのかについての議論をしたい。主流社会の思想との乖離を生んだ鹿野の思想的移動は、必然的に体制に対する不適応あるいは抵抗として表われるしかなかっただろう。

### 1 分野移動——動物学、地理学から人類学へ

物理的な移動の動線と、精神的な移動の動線が表す結果は、相当な違いを見せる。物体がある場所に置かれた結果や、人がある場所に居場所を定めた結果と、精神現象としての関心がある場所に重きを置いて、また別の場所へ移動した後の結果が示す違いは、質的な現象の違いである。その違いは、累積性という点で克明に表われる。物体や人がある場所に留まり残した痕跡としての現象と、関心が移動した後に残された痕跡としての現象の間の違いを見る問題意識を、文化移動という次元にのみ収斂させることは、精神的移動の現象を相対的に貶める結果を生む可能性がある。関心という現象は一人の人間の認知体系と密接な関連



写真5 イネズ・ドゥ・ボークレールの論文 [Beauchair 1958: 90] から抜粋した紅頭嶼の地図。

を持っているため、関心の拡大や多角化によって発生する重量と累積に基づく学問分野の移動は、創造的なアイデアをもたらす可能性が期待できる。そのため、物体と人の移動を文化移動という次元から見る以上に、分野移動の問題が提起する領域が深刻であると考えようになった。本稿では、鹿野の業績を通じて、文化移動を超える分野移動の問題について議論しようと思う。昆虫を中心とした動物学から人類学への分野移動が、鹿野にエスノ・アーケオロジーと類似した領域を開拓させるようになったことは、創造的アイデアの証拠として採択できる。私は、戦争中にボルネオに移動した鹿野の学問的関心が、どのような方向に深度を増していたのかと思うと、残念な気持ちを吐露せざるを得ない。鹿野こそが日本の人類学を新しく開拓できる力量を備えた人物だと考えているためである。台湾からフィリピンに移動した鹿野が、マニラでオトリー・ベイヤーと遭遇することで、自分の研究領域をフィリピンへ拡大したという事実を見て、彼がフィリピンから再びボルネオに移動した後、一体どのような関心の拡大が起こったのだろうかと思うようになった。エドワード・バンクス (Edward Banks) の業績が蓄積されていたサラワク博物館や、北ボルネオが鹿野に提供できたフィールドでの力量を期待することは、当然の人類学的想像力である。

本稿では、山崎柄根による「彼の文化人類学的業績を整理すると、次のようになるだろう。1 台湾原住民族の物質文化の研究 2 紅頭嶼ヤミ族における物質文化の研究 3 台湾における先史文化と現住原住民族文化の比較に基づく文化層の推定 4 台湾とその近縁地域を対象とした比較文化的試論 5 台湾原住民族の人類地理学的研究 6 東南アジアの物質文化史試論」[山崎 1988: 364] という要約について、精密に検討する機会を持つと思う。

「鹿野博士は、Yami に関する『活的字典』[宋 1950.1.24.: 1] であり、ヤミ族の故郷である紅頭嶼は、鹿野人類学の原点である。ここは鳥居龍藏が 1897 年に踏査した後、5 年後に報告書を発表したことがあり、「1929 年 4 月 12 日、鹿野忠雄が移川子之藏、小此木忠七郎、宮本、馬淵、そして巡査も一緒に踏査した場所だ。その成果が、鹿野の名前では 1930 年『宗教研究』2(1): 108-111 に報告されている」[Kokubu, N. 1949.7.: 46]<sup>1)</sup> と伝えられている。國分は、鹿野の台北高等学校の 1 年後輩で、鹿野と個人的に最も親しくしていた人物である。しかし、鹿野に関する國分の記録を、一部補完する必要がある。敗戦後、國分が台湾大学に留用された時に発表した文章によれば、國分は鹿野の最初の紅頭嶼訪問がいつだったか知らなかったことがわかる。國分は、鹿野が移川一行と共に 1929 年 4 月 12 日、初めて紅頭嶼を訪問したと記録した。鹿野が 1927 年に一人で紅頭嶼を訪問していたことや、その結果を紅頭嶼に関

1) 「1947 年 6 月 8 日 金關丈夫、蔡滋理、國分が(紅頭嶼を)訪問した」[Kokubu, N. 1949.7.: 47]。これと同一の内容が宮本によって次のように記録されている。「昭和二十二年五月に台湾大學地質學の馬廷英博士を団長とする蘭島(紅頭嶼)學術調査團なるものが組織された。一行は約五十名、この中に金關丈夫教授、國分直一氏も加わった」[宮本 1949.6.: 117]。この踏査後に國分が作成した文章であり、鹿野の論文「紅頭嶼ヤミ族の埋葬法に就いて」[鹿野 1930.3.1] を指す。

する「人類學的概観」の報告文として発表した事実は、鹿野人類学を理解するにあたって非常に重要な問題である。なぜなら、1928年に移川子之蔵教授を中心として台北帝大土俗・人種学教室が開設された時が、台湾に関する人類学研究に一線を描く出来事として認識されているためである。したがって、1929年に鹿野が初めて移川一行と共に紅頭嶼を訪問したと考えるならば、鹿野人類学は移川の影響から始まったものだと判断するのが自然である。しかし、「以下、余の其の當時の日記から抜書する。昭和二年八月二七日……」[鹿野 1928.7.1: 107]という記録は、鹿野が単独で移川一行よりも先に、つまり台北帝大の土俗・人種学教室が設立される前に、紅頭嶼のヤミ族に関する人類学的調査を実施したという事実を確認させてくれる。

鹿野は1927年8月、1カ月間紅頭嶼に滞在しながら動物採集や人類学的研究[鹿野 1927.11.3: 129]を実施した。この事実は、台湾研究という次元のみならず、日本人類学史において重要な問題として指摘されねばならない。台北帝大に土俗・人種学教室が設立され、本格的な人類学的研究の土台が準備されるより前に、鹿野が「人類学的」研究を意図的に実践したという事実に注目したい。「昭和4年の4月、紅頭嶼へ行き、調査をしました……土俗品のコレクションを中心にして……船が1箇月に1回しかないから、1箇月滞在したんですよ。駐在所のあき部屋を借りて。メンバーは、移川先生、小此木さん、鹿野さん、馬淵さん、僕の5人で、小此木さんは博物学者、鹿野忠雄君は動物で、鉄砲持って獲って来て鳥の剥製を作っていましたよ」[宮本 1983: 12]という表現は、鹿野を単に鳥に関心を持っている動物学徒だと考えたものである。宮本が1927年度に発行された鹿野の論文を読むことができなかったという事実が、これで確認された。1929年度に宮本が鹿野と共に紅頭嶼を訪問した時、鹿野は「二回目の紅頭嶼滞在中に全く弱ったのは、罐詰料理の連続であった。……大いに助かったのは、鶏卵と鰻であつた。……蕃人は、鶏を飼つて居るが、普通の場合、絶対に食べない。……卵を澤山持つて来ては、銀貨と交換しやうと来る。……omelette 攻めで胃の腑をあきさせ」[鹿野 1929.11.30b: 24]と報告した。この時、彼はヤミ族の文化に対する関心を深化させていたと考えられる。「鳥居博士の報告を疑ふわけではないが、物は試して、一つ墓地発掘となつたわけである。……発掘に仍つて、鳥居博士の報告とは違つた結果を得た。余の発掘は、唯の一回であるが、ヤミに聞いて見ても、皆、かくすると答へるので、余は現在の所、此の形式である事を確信して居るものである。鳥居博士の報告されたのは、特別な例外であらう」[鹿野 1930.3.1: 37-38]。移川一行が紅頭嶼に行った時、鹿野は案内人の役割を兼ねていたようだ。総督府在外研究員の資格で、移川子之蔵は土俗学と人種学の視察のために、イギリス、オランダ、ドイツ、インドなどで、1926年3月から1928年3月の間、留学という名目で外遊した。帰国後、移川は1928年から台北高等商業学校民族学講師を兼任した（実際に講義した記録を探そうとしたが、見つからなかった）。当時鹿野は台北高等学校

の学生であったが、鹿野は既に台湾の教員や学生の間でよく知られた「有名な」学生であった。「臺北高校出の若手學者で昆蟲専門研究學者鹿野忠雄君は、臺北時代から下宿一ぱいに約二万種からの昆蟲標本を飾り立て、高校生の間から「昆蟲博士」の異名を貰った」[臺灣日日新報 1934.12.23] ほどであるから、移川と鹿野を結びつけるのは、それほど困難ではなかったと思われる。

移川と共に紅頭嶼を訪問する前に、鹿野は既に紅頭嶼のヤミ族に関する人類学的論文 5 編と、パイワン族の文章 1 編を紙面で発表した状態であった。「人類學的概観」[1927.11.3], 「樂器」[1928.2.20], 「船」[1928.7.1], 「弓」[1928.11.15], 「パイワン族」[1929.2.11], 「ヤミ族と動物との關係」[1929.4.1] である。蕃人の樂器ロボについては、「彼等の不可思議な表現力と、敏感な感受性に對して驚歎するのである」[鹿野 1928.2.20: 109] と述べている。鹿野の文章が醸し出す最高の長所は、他者化の匂いが文字通り全くないことである。「此の進水式なるものは、ヤミの年中行事の一として、八月の月に行はれるのであるが……」[鹿野 1928.7.1: 107]。ヤミ族の船祭りに関する論考など、大学入学以前、まだ高校生の身分で専門學術誌である『民族』に論文を掲載したのは、鹿野が唯一の事例であろう。「ヤミ族の土俗的研究を、湧き出づる興味からやつて居る間に、調べ得たものであるから、土俗に關係したものが多く……」[鹿野 1930.7.29c: 78]。彼は、ヤミ族の習俗が異なることを知るための手段として、「土俗」に対する関心を表明し、はっきりした目的意識を持って民族誌 (ethnography) の作成に臨んだ。「蕃族獨特の絢爛たる文化の華を咲かせて居る蕃族は、パイワン族である。皮相にして害毒多き、現時の物質文明の弊風を受けて、其の讚ふ可き繁榮は、失はれ、惜しみても餘りある文化の俛は、次第に、影を潜めて行く」[鹿野 1929.2.11: 29]。文明と原始の間のジレンマを指摘する文明批判論は、卓越した観察力と判断力に起因している。

「鹿野はフィリピンーパタン諸島ー紅頭嶼から、さらに台湾、あるいは琉球列島への文化の移動線にも注目している」[山崎 1988: 368-369]。彼の文化移動に対する関心を支えて実践させていた動力が、分野移動であることがわかる。「パイワン族蕃地殆んど全領域を踏査」[鹿野 1930.3.15.b: 68] しながら、「サウライ」と呼ばれる祖先像について鹿野は、「普通の考古學的發掘物の様に、地下に埋もれる事なくとも、其の意義は大きいものと考へて居る。例すれば、諸地方に見られる巨石建築物の如きものである」[鹿野 1930.3.15b: 69] と評している。5カ所の事例を絵と一緒に提示した鹿野は、鼻輪、刺墨、耳飾、腕輪、貝貨の5種類の特徴について説明し、特に腰紐部分に裝飾された貝貨は、「イモガヒ (*Conidae*) の螺塔の基部を輪切りにしたもので、現在は衣服に縫ひ付けられたりして遺つて居るが、古代は、此れを貨幣として通用したものである。此の貝貨に使用されたイモガヒは臺灣近海に産する種類と其の種 (species) を異にする様である。何れにせよ、此貝貨や、此れを連ねた帯は、古代に盛

んに使用されたものらしい。パイワン族は、此れを *Karipa* と稱して居る。此の *Karipa* の分布は、臺灣蕃族内にも、パイワン、プユウマ、アミ、又平埔蕃の中にも見られる。又、インドネジャや、ニューギニア地方の蕃族の衣服にも用ひられて居る。余は、パイワン族の有する *Karipa* は、彼等が、南方より臺灣に漂着當時、已に此れを有して居たものと考へて居る」[鹿野 1930.3.15b: 71] とし、「南方より西南諸島を経て九州に及ぶ一連の文化系統に屬するものの如くである。臺灣と沖繩諸島の文化関係は今日の處、不思議にも注意せられて居ない」[鹿野 1940.11.1: 36] と分析している。文化移動に関連した鹿野の視点は、後日、國分直一にも受け継がれていく。

紅頭嶼と台湾の原住民から芽生えた彼の人類学的関心は、多様な分野の知識体系が動員され、東南アジアやポリネシアにまで延びて行った。シレックと呼ばれる鳥を利用したタイヤル族の吉凶占トは、敵を攻撃するための方便であり [鹿野 1930.3.29b]、木質が固い喬木である黒柿はカキノキ科 (*Ebenaceae*) だが、台湾原住民はこれで鋳を作った。紅頭嶼のヤミ族はこれを *Kamayo* と呼び、パイワン族は *Kamaya* と呼んだ [鹿野 1930.5.15a]。生姜は台湾原住民にとって特別な食べ物であり、首狩に行く前に心身を興奮させるためによく食べる、と報告した [鹿野 1930.7.29b]。生物学から出発した鹿野の学問的関心は、彼が人類学を展開する上で不可欠な原動力であった。その関心は、「動植物名より見たる紅頭嶼とバタン諸島との類縁関係」[鹿野 1941.8.25]、「フィリピン諸島、紅頭嶼並に臺灣の原住民族に於ける金文化」[鹿野 1941.9.25]、「インドネシアに於ける穀類、特に稻粟耕作の先後の問題」[鹿野 1943.10.5]、「アノボ族の介製稻穂摘具：附、東南亞細亞の介製稻穂摘具と石包丁との關聯」[鹿野 1943.11.25]、「ポリネシアの所謂柄附石斧と其の起源」[鹿野 1944.6.5]、「東南亞細亞に於ける黒陶、彩陶並に紅陶：金關博士の論文を讀みて」[鹿野 1945.11.5]、「台湾先史時代の文化層」[鹿野 1944.11.] へと延びて行き、鹿野学の体系を確立したと考えられる。

鹿野は、人類学教室編日本石器時代地名表から漏れ落ちた情報を提示した。特に、「臺灣蕃人の生字引と稱された森丑之助の著述」[鹿野 1929.11.30a: 54] を多く引用し、人類学教室の地名表で 58 カ所と記されていたものを、234 カ所に増やして整理した。また、彼の考古学的関心から、土器の形態を通じて、パイワンでもブヌンでもない、今は消滅した種族を判定 [鹿野 1930.9.15b] する作業もあった。エスノアークオロジー研究の実践事例として参考にできる論文としては、大山史前学研究所の青森県是川の発掘品中の昆虫に関する鑑定依頼による文書 [鹿野 1930.7.15a] を筆頭に、「臺灣原住民族に於ける數種栽培植物と臺灣原住民族史との關聯」[鹿野 1941.10.25]、「臺灣東海岸の火燒島に於ける先史學的豫察」[鹿野 1942.1.25]、「紅頭嶼の石器とヤミ族」[鹿野 1942.2.25]、「臺灣原住民族の生皮搔取具と片刃石斧の用途」[鹿野 1942.3.25]、「東南亞細亞の所謂除草具に就いて」[鹿野 1944.6.28] などがある。

人口地理学的な分析による「臺灣原住民族の人口密度分布並に高度分布」[鹿野 1938.8.1; 1938.9.1] は、論文の形式のみならず、分析方法においても卓越した力量を発揮している。台湾総督府警務局理蕃課が1936年から1939年までに行った調査結果である『高砂族調査書』6巻を基礎資料として分析した「臺灣原住民族に於ける漢族影響の地域的差異」[鹿野 1941.10.16] に関する論文は、血縁的な結合（婚姻関係）、有形文化の伝播（衣服）、無形文化の伝播（言語）など、多様な主題を動員して、統計的な分析を試みている。資料の精密な分析が目立ち、特定資料については、踏査によって再確認したフィールド資料も利用した。台湾総督府と日本拓殖協会の嘱託であった当時、統計資料の分析においても鹿野は緻密な分析力を発揮し、「最近十年間に於ける臺灣原住民の移住と人口分布變化」[鹿野 1941.3.18] 及び「臺灣に於ける本島人の出身地別人口分布に関する調査」[鹿野 1943.3.31] を報告した。彼の地理学的知識と分析能力が、台湾原住民社会を巨視的な視点で眺められるように作用していたことがわかる。また、このような総合的な知識を背景に、台湾原住民の研究史を一瞥できる入門用の「臺灣原住民族の分類に対する一試案」[鹿野 1941.4.30] と「臺灣原住民族の人類地理學的研究序説」[鹿野 1942.3.5] も提示した。

フィリピンから帰国した後に作成した「回教徒モロ族と其の統治」は、フィリピン南部の少数民族集団に対する関心を披瀝したものである。題目とは異なり、歴史的な内容と小種族の区分に関するスケッチだけが[鹿野 1943.7.10]、少数民族集団を見つめる視点は、当時としては新しい分野の開拓であった。

エスノグラファーとしての鹿野の真価は、何といても紅頭嶼ヤミ族に関する報告書である。「紅頭嶼ヤミ族の大船建造と船祭」[鹿野 1938.4.15]、「紅頭嶼ヤミ族の粟に関する農耕儀禮」[鹿野 1938.9.10]、「紅頭嶼ヤミ族の出産に関する風習」[鹿野 1939.2.17]、「紅頭嶼に於けるアウム介製二種の身飾品 並に夫れ等のモチーフの起源」[鹿野 1944.5.28]、「紅頭嶼ヤミ族と飛魚、附 比律賓バタン諸島の飛魚漁」[鹿野 1944.5.30: 505]などは、当時誰も真似できなかつた卓越した民族誌である。特にフィリピンから帰国した後に発行された論文は、鹿野学の流れを人類学の主流に位置づけることのできる内容だということは明らかである。1943年後半から1944年の間に出版された論文の内容には、フィリピン大学のオトリー・ベイヤーとの交流による内容が追加された可能性がある。主題の選択においてのみならず、資料の分析過程で見せる鹿野の繊細な視点が感じられる。ヤミ族の飛魚捕りに関する記録は、鹿野が原住民の文化をどれほど大切に考えていたのかを理解するのに十分だ。「松明漁を行ふ大船に異邦人を乗せる事は禁忌であるが、一九三七年の或る日特別に許されて、之れを見る事が出来た」[鹿野 1944.5.30: 528]。「飛魚」捕りを別の表現では「松明漁」と言っていることがわかる。また、1927年から1937年までの10年間、紅頭嶼のヤミ族に関する研究を続けながらも、ヤミ族の禁忌を守るために努力していた人類学者鹿野の姿が見えてくる。出版

期間が約2年ほどかかったのは、戦争中の出版事情を反映したものと考えられる。「本稿を脱稿したのは昨年六月であった。其の翌月七月より今年三月にかけて約八カ月間筆者は比律賓に渡る機会を得、主として民族學の研究に没頭するを得た」[鹿野 1944.5.30: 569]、「八月より九月にかけて毎土曜日の午後此の街（筆者注：マニラ市のサンフェルナンド街，バタン島民約200名居住）に通ひ，バタン島の習俗に就き聽書を行ひ」[鹿野 1944.5.30: 570]。このように，紅頭嶼とバタン島の文化的な連結の輪を証明しようとする彼の努力が，マニラでの囑託勤務中にも継続して行われていたことがわかる。

鹿野の台湾原住民の踏査は，1925年から始まった。1936年から渋沢敬三が鹿野の作業に関心を持って助けてくれるようになり [Kano and Segawa 1945.4.20: 1]，その結果の一端が瀬川孝吉と共同名義で出版された英文版の *The Illustrated Ethnography of Formosan Aborigines* である。419枚の写真が収録されたこの本は，「Contribution from the Shibusawa Institute for Ethnographical Research (Nippon-Jomin-Bunkwa-Kenkyusho)」であるとした。日本常民文化研究所の英語名称も，明らかになったわけである。「鬼畜米英」を標榜しながら英語を追放していた大東亜戦争の時期に，英文版の膨大な写真集が登場した背景については，気になるところだ。しかし経緯がいかなるものであれ，この著書は鹿野の台湾原住民研究の決定版の一つであると言っても差し支えないだろう。

また別の重要な作業は，鹿野論文の選集である『東南亞細亞民族學先史學研究』であり，この著書は「初校を見終らない中に，筆者は陸軍より北ボルネオの民族調査を命ぜられ出發することとなった。是非とも索引を作製して巻末に附したいとの希望も此處に於て不可能となった。従つて夫れは出來れば本書第二卷に於て果したいと思ふ。昭和一九年五月二四日 博多の旅舎にて 著者 識」[鹿野 1946.10.15: 4]。すなわち，1944年5月24日に初校の段階で鹿野は北ボルネオに向かい，終戦後の1946年10月15日に出版されたのが先の単行本である。したがって，本の書名にも鹿野の意志が込められていると考えることができ，全ての内容は鹿野の手でまとめられたものであることがわかる。出版期間が2年半程度かかったのは，途中で終戦という出来事があったためである。この単行本は，鹿野学の基本枠を見せてくれる最初の著書であり，総決算の意味を持っている。この本の題目に「臺灣を中心とせる」という副題がついている。それは「東南亞」を見つめる視点が「臺灣」から出發したという意味でもある。関連する西洋文献を参考とし引用することで自分の論拠を裏付けるなど，理論展開が模範的である。甕棺については，バイヤーの文献を引用している [鹿野 1946.10.15: 110-111]。第1章は「比島の金文化と其の北進」であり，紅頭嶼を始めとする台湾との関係を主に扱っている。「紅頭嶼の最高山はジラコーバック（紅頭山）と呼び海拔五四八米に達する。……昭和二年に初めて此の絶頂に立つた時に……遙かな海上に正しく島と覺しき二黒點が眼底に映ずるのを認め得た。同行の蕃人はそれがイクバラット島とイバタン島であるこ

とを告げ、彼等の祖先は彼地より此の島に來り、其の後も相互に交通したと語った」〔鹿野 1946.10.15: 36-37〕。軒檜に関する議論をした論文は、「マニラ科學局博物館人類學部の土俗蒐集品を研究中」〔鹿野 1946.10.15: 172〕に作成したものである、とマニラ滞在時代の背景を説明した。「日本銀行總裁，民族學協會副會長澁澤敬三子爵は始終多大なる理解と同情とを以て筆者の研究を鞭撻」〔鹿野 1946.10.15: 3〕したと感謝の言葉を付け加えることで、前述の写真集発行との関連を明らかにした。心ならずも鹿野の遺著となってしまった『東南亞細亞民族學先史學研究』（1946.10.15 発行）は、國分を始めとする台灣研究の同志らによって「下」巻（1952年9月15日 発行）へと継承された。「戰爭中鹿野忠雄博士がバイヤー教授のコレクションの保護整理に力められたため、その一部の成果は「東南亞細亞民族學先史學第二卷」に僅に見られるにしても鹿野博士が未だにボルネオから歸還されていない今日においては我々はバイヤー教授との連絡によつて我々の南方についての知見を加えるより他ないのである」〔國分 1952.11.30: 27〕。敗戦後、未歸還の状態の鹿野忠雄が無事に歸還することを祈る心の込めた作業であり、フィリピンのオトリー・バイヤー教授もこの作業に賛同していたのである。

鹿野は、北ボルネオに行く前に、既にボルネオに対する関心を文章で発表したことがある。オランウータンを抱いているタヤク族の写真を掲載したり〔鹿野 1939.11.14: 283〕、自分が行ったこともないフィリピンの山と共にボルネオの山に関する文章を発表したこともある〔鹿野 1942.5〕。それは、登山の願いが込められた文章であつただろう。後日、彼はその山々がある場所を帝國軍隊の命令により訪問する機会を得、登山の奇才であつた鹿野は願いを實踐したと同時に、そこから戻つて來られないという運命を辿つた。

## 2 思想移動——反植民から反戦へ

帝國主義的な統制体制の下で、思想に関連した知識人の行動に表れた特徴的な現象の一つが、思想転向であつた。本稿の理論展開のために、思想転向と思想移動の違いについて操作的定義が必要である。まず、政治的な目的の介入の有無によつて、二つに区分したい。政治性を前提にしたものを思想転向とするなら、思想移動は政治的目的とは無関係なものである。鹿野の文章からは、政治的目的を意図した内容を一件も見つけることができない。彼が発表した論文が結果的に政治的影響力を及ぼす内容だとしても、鹿野がその文章を作成する意図は、至極學問的だという点を確信できる。金関丈夫の文章に表れた隱密の極地である隱抗策略〔全 2014.3.30〕を、鹿野の文章からは見つけることはできない。金関の方法がレジスタンスの抵抗性を追求したものだとするれば、鹿野の方法は公開的な表現による抵抗性であつたといえる。鹿野は、自分の思想を、婉曲した表現で滔々と學問の脈絡内で展開した。

鹿野が學問活動を行った時期を、1927年から1945年までと算定するなら、初期の数年を

除外した全期間が、帝国日本の戦争と一致する時期である。1931年の満州事変、1937年の日中戦争、1941年の大東亜戦争へと繋がる戦時体制のための思想統制が、学問活動にいかなる影響力を及ぼしたのかについては、既に様々なレベルで研究が進んでいる。私は、この期間に鹿野個人の学問活動に表れた思想的な問題について、具体的な議論をしようと思う。知識人の思想統制のための政府レベルの組織や活動について、鹿野が直接的に政治的対応をした例は発見できなかった。しかし、鹿野は自分の人類学的学問活動の展開過程において、自分の信条に背馳する政府の政策や軍事戦略については、明らかに自分の意見を文書で披瀝したことを指摘できる。帝国日本の植民統治と占領戦争のための思想統制が要求する方向に従順に従わず、自分の信念に従って思想を展開した鹿野の言行に、思想移動という枠組みから光を当てたいと思う。鹿野の立場が、当代の占領戦争と植民統治に好意的な反応を見せる知識人の立場表明とは、事実上正反対の方向であったことも確認する作業が必要である。

「土地問題に対する誤解は、最も強く蕃人を刺戟して、蕃情を動搖せしむる原因となる。然し土地の利用にしても、彼等の慣習を精査して、幾分か其の縁故を認めて、彼等の生活に同情ある處置をとれば、彼等蕃人を擾亂せしむるを未然に防ぐ事が出来るであらう。霧社事件に限らず過去の多くの事件は、其の原因の一端を此の土地問題に發して居る。理蕃に當つて、彼等蕃人の郷土觀念を心得へ、其のプライオリティーを尊重し、理解同情ある方針をとれば、今後再び霧社事件の如き不祥事を招く事なしとは、疑を容れぬ處であると信ずる」[鹿野 1932.1.1: 39]。1930年10月27日に発生した台中州の霧社事件について総督府が発表(1931年1月6日)した「霧社事件の顛末」の中で、事件発生原因を提示したこと(1. 建築材料運搬の苦痛並賃銀支拂遅延に対する不平, 2. ビホサツボ並ビホワリス等の畫策, 3. マヘボ社頭目モーナルダオの反抗心)[匿名 1931.2: 102-105]についての指摘である。鹿野の遺品から出てきた蕃地出入許可証(1931.7.28 発行)によれば、彼は蕃族調査を目的として、7月28日から8月24日まで新高/台中州地域に入った。彼の蕃地出入許可証のほとんどが、昆虫及び動物の標本採集に関連したものであったのに比べ、この場合は蕃族調査が目的であった。それはつまり、霧社事件に関連があると考えられる。なぜなら、12回の蕃地出入許可証<sup>2)</sup>の内、

2) 鹿野忠雄の蕃地出入許可証一覽(一部)

証明書名称	日次	目的	期間	地域	備考
蕃地出入許可証(73号)	1925.5.9	昆虫採集	5.9-5.30	ウライ一圓	
蕃地出入許可証(157号)	1925.6.11	昆虫採集	6.11-16	竹東郡役所	
蕃地出入許可証(52号)	1927.2.6	植物採集	2.6-7	ウライ	外1名*
蕃地出入鑑札(8号)	1927.3.17	昆虫採集	3.17-20	マカシヤ監視區 (高雄州)	
蕃地出入鑑札(77号)	1927.3.20	昆虫採集蕃地見學	3.20-31	アマワン-リキリキ (高雄州)	
蕃地出入許可証(1288号)	1927.4.11	昆虫採集蕃地見學	4.11-15	初音・花蓮港廳	

「蕃族調査」の目的で入山したのは、たったの1回であったからである。したがって、「未開人の土地観念に関する一資料」[鹿野 1932.1.1: 34]は、その時実施した蕃族調査の報告書であったわけだ。当時の蕃族調査は、理蕃政策のためのものであり、鹿野もこのような政策上の目的で蕃族調査に動員されていたことがわかる。鹿野は総督府の分析が非常に枝葉的で個人的なレベルであることを批判し、事件発端の原因は植民地政策の根本的な問題である土地にあると吐露する。「霧社事件に限らず過去の多くの事件」を指摘する鹿野の問題提起は、植民政策全般に対する批判でもあり、植民地における土地所有の問題が植民政策の核心であるという鹿野の視点は、当時の西欧の人類学界の共通の関心事であった「実践人類学」(practical anthropology)[Malinowski 1929]と一致していたことを確認しておきたい<sup>3)</sup>。鹿野の意見が、理蕃政策大綱にどの程度反映されたのかは具体的にわからないが、鹿野は植民政策や「南方進出」においても、学問的研究を優先しなくてはならないとして次のように主張した。「理蕃対策は其の種族生活の完全なる研究理解と並行す可きが理想である……各種族の生活状態を闡明し、之れを民族學的に處理整理するに先立ち、是非とも基本的な人口分布圖が必要である」[鹿野 1939.9: 30]。「南方進出には民族學的調査が殊に先行す可きであり、從來不幸にして此の種の用意がなかつたならば、之れと並行又は追ひ驅けて調査研究に邁進す可きは論を俟たぬ處であらう」[鹿野 1940.11.1: 26]。

枢密院と外務省の反対にもかかわらず、帝国日本は戦略的に大東亜省を設立した(1941年11月1日)。このような変化は、以後展開する戦争と深い関連を持っていた。それは軍事部門だけでなく、汎政府組織レベルで大東亜戦争が準備されていることを意味するものである。帝国政府傘下の全ての組織は、「大東亜」をキーワードに動くほかないというシステムが整えられたのであり、これによって学界も積極的に総力戦に臨む態勢を推進した。「大東亜に於て

証明書名称	日次	目的	期間	地域	備考
入蕃假許可證	1927.5.7	昆蟲採集蕃地見學	5.7-9	臺中州警務課	
入蕃許可證	1927.5.16	見學及昆蟲採集	5.17-30	阿里山／臺南州嘉義郡役所	
蕃地出入許可證(313号)	1927.9.24	昆蟲採集	9.24-12.30		警務課
蕃地出入許可證	1928.8.29	動植物採集	8.29-9.25	臺中州	マレツバ
蕃地出入許可證	1931.7.28	蕃族調査	7.28-8.24	新高／臺中州	
蕃地出入許可証	1933.9.8	動物研究	9.9-9.23	臺北州	外1名**

\* 瀨川孝吉(生き物趣味の會の幹事, 鹿野忠雄 1929.11.30b 参照)である可能性が高い。

\*\* 田中薫(36, 神戸商大)経済地理教授と一緒に台湾の南湖大山で氷蝕地形を発見した。この時二人は9月13日から4日間の登山を行っている。田中がその内容を日本地理学会で発表し、このことが『大阪毎日新聞』(18135号, 1933.10.24.)に掲載された。

- 3) “To take another subject of paramount importance, namely, land tenure in a primitive community. The apportioning of territory must be one of the first tasks of an administrator, and in doing this he has first of all to lay down the broad lines of his policy and then see that they are correctly carried out by his officers” [Malinowski 1929: 29-30] .

日本が指導的位置を占める運命にあるのは、この日本民族の有する文化の特異性にある事に着目しなければならぬのである。外来文化を吸収しながらも本質的なものを厳然として保持し、侵されない所に日本精神の強さがあると私は信じている」[宮本 1941.6: 10]という人類学者の主張が戦争協力の言説として提案され、このような雰囲気を作成するために、学界の主導的理論家たちが少なからずの役割を果たしたことは十分に論証できる。本稿では、人類学分野と密接な関連を持っていくつかの事例を整理することで、学界や政府組織、そして軍事行動が、どのように相互相乗作用に協力したのか点検してみようと思う。なぜなら、帝国日本の総力戦という状況下で、鹿野がいかなる立場を追求し、堅持したのかということの背景を理解することが必要だからである。

1942年の帝国大学新聞によれば、帝国学士院では、大東亜共栄圏確立の基礎的条件として東亜諸民族調査が必要だという判断の下、1940年2月に山田三郎博士を委員長として東亜民族調査委員会を設置した。東亜諸民族調査委員会を設置してから2年が経過した時点で、大東亜文化圏の建設における基礎的研究の使命を重く考え、東亜諸民族関係文献カードの作成を完了したという。また、東亜諸民族分布図の発行や、民族別の大東亜要誌も作成した。そして、東亜諸民族に関する体質人類学的、言語的、社会経済的あるいは宗教土俗芸術的など、四部門の調査を始めた。委員会は、宇野円空博士を主任とし、東大の長谷部言人、橋本進吉、石橋智信を指導嘱託に委嘱した。文部省は、「大東亜學術教育聯絡協議會」を設置し、南方占領地域における学術教育上の具体的な運用に関する連絡を担当するようにした。第一回委員会が開催され、会長橋田文相、副会長菊池文部次官以下、文部省、陸海軍、企画院、大学から、委員幹事など十数名が会合した。大学関係者は、東大総長、京大総長と教授らであった。南方既設学術研究施設の管理及び研究継続の企画に関する件、民族研究所の現地における具体的な運営に関する件、学術探検派遣に関する件、熱帯医学研究所設置の件などを協議した結果、現地に対する研究者の割当や探検隊の派遣は、全て本協議会を通して現地の具体的要請に応じ、統一的に対処するようにした。熱帯医研の設置は、日本人の南方進出とも関連する緊急事項であるため、可及的速やかに設置するようにし、中央に本部を置いて現地に実地研究施設を設置することとした（『帝國大學新聞』1942年7月13日付）。

また、同年の東京帝大の五月祭は、「大東亜戦争と學生」というテーマで開催された。農学部は7学科全てで参加し、作物教室の南方農業資源解説、砂防工事の重要性の外、農業土木の圧巻は大東亜共栄圏膝栗毛という題名の土木行脚に関する展示であった。また、大東亜共栄圏が葡萄酒を要求するが、米英の供給が遮断されたため、自前で生産するという計画も樹立された。理学部では、「南方の科学」というテーマの下、植物学科がキナやココなどの南方植物、地理学科は大東亜室を設置して「等日戦局圖」、土地利用図、ハワイ地図、ハワイの溶岩などを展示した。人類学科は、南方民族の身長と頭の大きさの分布図、南方の土族器、身体

的特徴を示した資料を陳列し、新しい同胞の姿を披露した。鉱物学科は、戦時資源に対する関心を高めるために資源鉱物を展示し、地質学科の展示には、大東亜戦下の石油に関する詳細な説明があった。また、記念講演会では東洋文化研究所の宇野円空教授が、「南方民族の生活」について、医学部の竹内松次郎教授が「南方の醫學」について講演した（『帝國大學新聞』1942.5.4. 第899号）。このように、学界と帝国日本の総力戦は深く結びついて行った。

南方の占領地が拡散するにつれ、占領地の円滑な統治のために軍政と民政が実施され、鹿野はフィリピンの軍政府の要請により陸軍囑託の身分でマニラに行くことになった。その命令に関連した電報（写真6）には、陸軍用紙が使用され、「渡集政電三九七號」という文書番号がある。発信者は渡集団軍政部長であり、陸軍次官に伝達される電報である。内容は、「比島ニ於ケル地質及生物學調査ノ爲京都帝大理學博士鹿野忠雄及同校黒田徳米ヲ當軍囑託ト致度ニ付往復ヲ除キ約二箇月間ノ豫定ヲ以テ比島ニ派遣方詮議願度 京都帝大トハ交渉済（終）」となっている。「陸軍省 大臣官房」印と「陸軍省 軍務課」印があり、「五月二十六日」の印もある。「局長」と「課長」及び翻訳者の印を含めて総計12個の印が捺されている。「地質及生物學調査」と記録されていることから、鹿野は地質学、

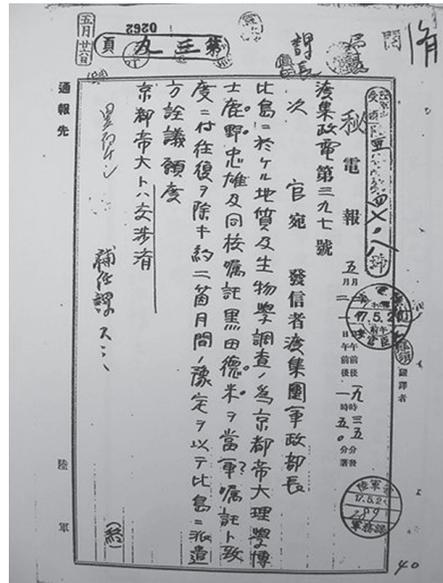


写真6 鹿野の「比島」出張に関連した「秘電報」。1942年5月20日付け。陸軍省の印が鮮明である（外務省外交史料館所蔵）。

生物学は黒田徳米（1886-1987）教授の担当であったと思われる。黒田は日本貝類学の始祖である。この電報から、戦時体制下で軍部の要求に応じざる得ない鹿野の立場が見えてくる。しかし、体制の要求の枠の中で鹿野が展開したのは、体制が要求する思想とは異なる方向で表れたことをよく見る必要がある。1942年7月、マニラに到着した鹿野は、ある種の手続きを踏んで、サント・トマス収容所に収監されていたオトリー・バイヤー教授（米国籍のフィリピン大学人類学教授）を釈放させた。その過程は、容易ではなかったことが推察される。バイヤー教授が釈放された日を正確に知ることはできないが、鹿野の誕生日である10月24日に一緒に記念写真を撮っていることからある程度説明できる（次頁写真7）。

9名のフィリピン人と2名の日本人、そして1名の米国人が登場するこの写真の主人公は、鹿野である。フィリピン人は皆、博物館関係者だろうし、オトリー・バイヤー教授は収容所から釈放された米国（敵国）人である。主人公である鹿野とバイヤー教授だけが、白い背広に



写真7 鹿野忠雄の誕生日記念写真。1942年10月24日“Manila, New Philippines”にて撮影したもの（Henry O. Beyer 所蔵）<sup>4)</sup>。

ネクタイを締めている。バイヤー教授の右手にはシガーが持たれている。鹿野は、23歳年上のバイヤー教授を敵国人として扱わず、彼がフィリピン大学人類学教授として続けて研究できる環境を整えた。バイヤー教授は既に日本の学界ではよく知られた学者として、台北帝大の移川子之蔵教授とも繋がっていたし（両者ともハーバード大学人類学科ローランド・ディクソン教授の指導学生である）、「南方土俗學者」三吉朋十<sup>5)</sup>は、バイヤー教授の厚意でフィリ

4) “Dr. TADAO KANO’s BIRTHDAY CELEBRATION Manila, New Philippines, October 24, 1942”と写真の中に文字が書かれている。鹿野の誕生日記念に撮った写真である。“New Philippines”とは、日本軍の占領後に生じた名称であり、その写真に登場する人々についても記録されている。“Front row: Dr. H. Roxas, Lt. Fukada, Dr. T. Kano, Dir. Argeulles, Dir. Abadilla, & Prof. Beyer / Back row: Dr. C. Manuel, Mr. G.S. Maceda, Dr. J. Maraño, Dr. E. Quisumbing, Mr. R. Galang & Mr. A. Reyes”。A. S. Arguellesは、日本軍がフィリピンに侵攻する前に*The Philippine Journal of Science*の編集長をしていた人物である。Canuto G. Manuelは鳥類学者である。Joaquin Mejjorada Maraño (1891-?)は生化学者で、camphorの木(樟脳)の葉の窒素研究で有名である。1923年、University of Michiganで博士学位を取った。彼の博士論文はA Biochemical Study of Resistance to Mildew in Oenotheraである。Hilario A. Roxas (1896-?)は魚類学者である。彼の著書には、1937 *A Check List of Philippines Fishes*. Manila: Bureau of Printingがある。Quirico. A. Abadillaは地質学者であり、鉱山局長 (Bureau of Mines)を歴任した。彼の論文には、1931. 7 “Geological reconnaissance of Northwestern Capiz province, Penay, Philippine Islands”, *The Philippine Journal of Science* 45(3): 393-414がある。Eduardo Quisumbing (1895-1986)は植物学専攻者であり、*The Philippine Journal of Science*の副編集長をしていた。1923年シカゴ大学で植物学博士学位を取り、後日 National Museumの館長を歴任した(1961年退任)。彼の著書としては、1234ページの1951 *Medical Plants of the Philippines*. Manila: Bureau of Printingがある。

5) 「抑も私は南方土俗學に没頭する老書生である」[三吉 1942.8.20: 305]。「比賓大学のバイヤー博士に招かれて晩餐の饗應を受けた」[三吉 1942. 8.20: 103]。三吉朋十 (1882年2月10日～1982年2

ピン北部を踏査したこともあった [三吉 1937.11.1; 1942.8.20]。

マニラに出発する時に持参した自分の論文抜き刷り（人類学雑誌最新刊に掲載されたもの）を、ベイヤー教授に贈呈したことは、鹿野には既に計画されたことであった。彼と共にフィリピン的人类学と先史学に関する研究のできる物理的空間を確保したことは、鹿野の思想が戦時体制ではなく、学問体制に属していることを十二分に証明している。彼は大東亜戦争遂行中である帝国陸軍の陸軍嘱託という身分で、「東南亞民族學先史學研究」のための「比島先史研究所」の研究員の役割を務めていたのである。鹿野の立場から見れば、帝国陸軍が鹿野にそのような機会を提供したという方がむしろ正しい順序かもしれない。タイピスト速記者として「有史前東洋研究所」に勤務するナチビダド・ノリエガ・オカンポ (Natividad Noriega-Ocampo) <sup>6)</sup> のために、軍政府と憲兵隊の了解を得た二つの証明書を以下に添付する。一つは、「フォート・サンチャゴ」にあった憲兵隊から発行されたものである。ここには、憲兵隊所属の「Isshiki 少尉」の名前と電話番号 (Tel. 29955) が記録されている。

もう一つは、「比島先史研究所」のオトリー・ベイヤー教授の名前で発行されたものである(写

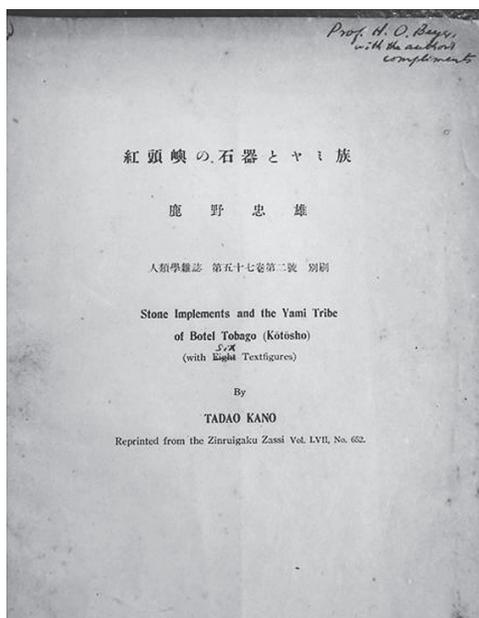


写真8 鹿野がベイヤー教授に贈呈した自分の論文の抜き刷り (Henry O. Beyer 所蔵)。

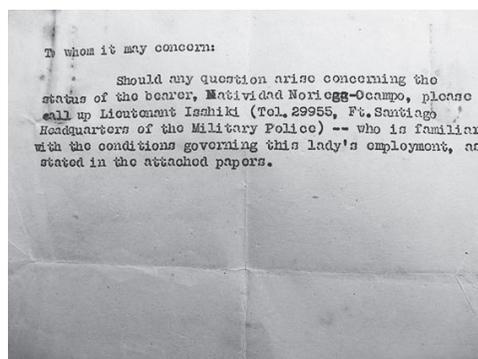


写真9 Natividad Noriega-Ocampo のための憲兵隊証明書 (Henry O. Beyer 所蔵)。

月9日) 北海道生まれ。1905年、札幌農学校卒業。マニラに渡航し昆虫採集。三井物産香港駐在員(1906-08年)。彼の号が香馬である。

6) ノリエガは、戦後も長い間ベイヤー教授の秘書を務めた。

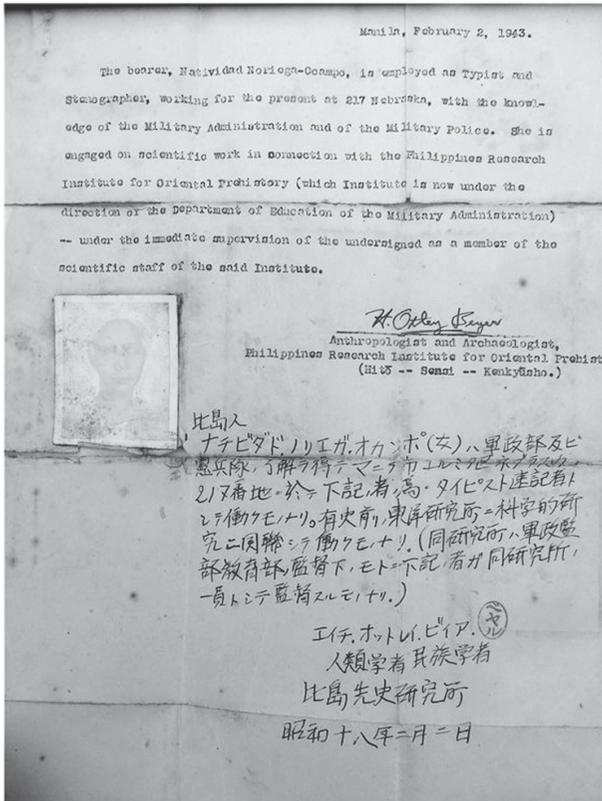


写真 10 (右) ナチビダド・ノリエガ・オカンポの身分証明書。オトリー・ベイヤー教授のサインがある。比島先史研究所の英文名称が、Philippines Research Institute for Oriental Prehistory であることがわかる (Henry O. Beyer 所蔵)。

写真 10 (右) ナチビダド・ノリエガ・オカンポの身分証明書。オトリー・ベイヤー教授のサインがある。比島先史研究所の英文名称が、Philippines Research Institute for Oriental Prehistory であることがわかる (Henry O. Beyer 所蔵)。

ストまで雇用されたということは、鹿野とベイヤー教授が本格的に研究結果を生産する作業をしていたと考えられる。彼らの共同プロジェクトは、何であったのだろうか？ これら全てのことが、鹿野の計画によって推進されたことは言うまでもない。「1943年、日本(占領軍)当局によってベイヤー博士に初めて提供された古い建物に、博物館と考古学民族学研究所が置かれた。戦争の間に起きたこのような過程は、ベイヤー博士の日本人の友人であり科学者である鹿野忠雄博士の努力によって成された。科学者として知られたベイヤー博士は、政治的に無害な人として判定され、彼の収集品を保存するにあたって、彼を助ける措置が取られた」[Lirazan 1965.7: 22]。フィリピン側の記録も、同一の内容を伝えている。

陸軍省の電報に記録されていた最初のフィリピン出張期間は約2カ月となっていたが、鹿野の滞在期間は8カ月に延長された。「秘電報」に示されたように、最初の任務が「地質」であった点を勘案すれば、鹿野の比島滞在延長は、追加的な任務として博物館及び先史学に関

真 10)。この証明書の発行人は、「比島先史研究所」の「人類学者民族学者」であるオトリー・ベイヤー教授となっている。敵国人であるベイヤー教授の名前で、研究所勤務者の身分が証明されたのである。また、「同研究所は軍政監部教育部監督下」にあることが明記されている。「ベヤル」と刻まれたベイヤー教授の印章が印象的である。下段の日本語で書かれた部分の筆跡が、誰の物なのか気になってくる。この証明書の発行日時である1943年2月2日は、鹿野がマニラに赴任して6カ月経った時のことであり、この日付が研究所の設立日である可能性がある。ベイヤー教授には、研究所の空間とタイピストまで提供され、研究に没頭できるように配慮されたことがわかる。研究所にタイピ

連したものであったと考えられる。したがって、その間に研究所が設立され、それから2カ月も経たない1943年3月末時点で、鹿野は陸軍嘱託の任務を終えて帰国した。マニラの博物館でオトリー・ベイヤー教授と別れる際、鹿野は自分に近づいて来る不吉な運命について吐露したという証言がある（ベイヤー教授の孫、Henry O. Beyerによる。2013年7月18日、フィリピンのバナウェにてインタビュー<sup>7)</sup>。鹿野がマニラを去る前



写真11 Henry O. Beyer氏(左)と筆者

に、ベイヤー教授に「遠からず自分は死ぬかもしれない」という言葉を残したのは、自分に関する推測的な予言ではなく、軍政当局や憲兵隊から既に、直接あるいは間接的なある種の注意や脅迫を聞いたことがあったということ想像するのに十分である。鹿野が去った後、「ベイヤーは1944年9月、サント・トマス(Santo Tomas)収容所に再収監され」[Ravenholt 1964.5: 388]、その期間は「1944年9月24日から(米国が進駐した日である)1945年2月11日までであった」[A.T.S. 1965.7: 39]。鹿野がマニラを去った後、ベイヤー教授は約1年半の間、研究所の研究活動がある程度継続していたようである。しかし、この期間の活動についてはまったく残された資料を発見できなかった。

1942年の夏を分水嶺として、戦況は悪化の一途を辿った。西太平洋の制空権と制海権を掌握するために、米軍と連合軍の攻勢が強化され、日本軍の玉砕作戦が加速しながら、総力戦態勢のための物的、人的供給が緊急となった。この頃発刊されていた鹿野の論文は、現地踏査によるものではなく、既刊の各種資料を元に、統計的な分析が主に試みられたものであった。戦時下、軍事体制が許可する旅行とは、限定された地域に限って組織的に動員された団体訪問でしかなかった。そのため、鹿野が慣れ親しんだ人類学的な現地調査は不可能であった。一方、戦時動員のための思想統制強化は、大東亜建設という名分に向かって拍車をかけていた。たとえば、「戦争自體が文化の發展を沮止するといふことは疑ひがたい。けれどもまた、戦争によつて直接に助長せらるる文化の一面がある。それは國民の道徳的生活であり、また戦争

7) ヘンリーの英語名はHenry O. Beyerであり、1942年生まれで、ベイヤー教授の孫にあたる。OはOtleyの略字であり、略さずに書けばベイヤー博士の名前と同じになる。両者の違いを表すためにベイヤー博士はH. Otley Beyer、孫はHenry O. Beyerと表記する。ベイヤー博士が死亡する前の8年間、マニラで祖父と孫と一緒に住んでいた。したがって、ヘンリーは祖父から過去の出来事について様々な話を聞く機会があり、「カノウ」という名前をはっきりと記憶していた。彼は今も祖父の遺品を保管しており、祖父が残した収集品を基に、自らも民俗品を収集していた。祖父は常に、「カノウ」がいなければマニラ博物館の遺物は全て日本に移送されていたろうという話をしていたと証言した。

に必要な技術乃至経済の方面である」[高田 1942.3: 169]、「大東亞社會の建設といふ國家的使命に直面している我國現下の状態において、社會學の喜ばしい積極的翼賛の期待せられることは勿論であらうと思ふ。それは戦勝を通して輝しい一大廣域社會の建設といふ世界史的大事業への學的翼賛として恐らく空前のものとなるであらう」[松本 1943.5: 342]といった具合である。1943年11月5日、東京で大東亞戦争完遂と大東亞建設の方針に関して、隔意なき協議のための大東亞會議が開催され、その結果として11月6日に「大東亞共同宣言」が発効された。学問の戦争協力はさらに積極的に要求され、「本稿は人種學的又は民族誌的研究を志したのではなく、南方民族對策樹立のための参考資料を提供せんがために、南方諸民族の政治的、經濟的、軍事的能力の調査を旨としたものである」[國策研究會 1943.12.15: 1]とされた。民族研究所長は「民族の研究調査の必要は戦局の推移につれて愈々加り……民族政策と緊密直接の聯絡を有する具體的知識に属する研究」[高田 1944.2.21]を要求した。1944年1月24日、大陸打通作戦が発効され、ちょうどその4カ月後、鹿野はまた別の陸軍囑託任務遂行のために北ボルネオに向かった。現地調査に飢えていた鹿野にとって、ボルネオ行きは、東南アジア研究のためのもう一つの出口だと考えられたのかもしれない。

鹿野の立場は明確であった。「民族學の使命は民族乃至種族生活の基礎構造を究め」[鹿野 1946.10.15: 1]。「民族學は種族乃至民族の相異性の立場から觀察し、政治に對して参考資料を與へるもので、之れ以上は行き過ぎである」[鹿野 1946.10.15: 2]。鹿野の論文を渉獵してみると、彼が「民族學」という單語を適用するのは、多分に政策と関連した問題について言及する場合であつたと思われる。1927年の紅頭嶼に関する論文から、彼は「人類學」という單語を愛用していた。そのため、上記の論考で彼が「民族學」という單語を使用したのは、特別な意味を持っている。彼がこの文章を執筆した当時、人類学分野で戦争協力の先鋒に立っていた組織が、文部省傘下の民族研究所であり、その研究所の責任者らが民族學者であつたという事実と比べて考える必要がある。鹿野は、民族學が学問の本分を守るためには、政治的介入や戦争協力を謹むべきだという点を説破したのである。この主張は、戦争末期に北ボルネオに向かいながら、鹿野自ら校正した文章であるという点に注目しなくてはならない。全てが戦争協力や戦争の煽動の方向に向かっている時、鹿野の思想は反対の方向に移動していた。

鹿野は台北高等学校在学時代に、高校の教科課程もまともに守らず、自分の意志に従って好奇心ばかり追いかけてながら資料収集に没頭していた自由主義者であり、自然の中で自己啓発的に(heuristic)自分の研究主題を見つけ出した自然主義者であつた。「文明と原始野蕃とのヂレンマに落入っている」(写真3)自分を明確に認識する程に、鹿野はバランス感覚を備えていたヒューマニストであつた。自由と自然、そしてヒューマニズムに基づいた鹿野の人類學が、文明の側から原始を眺める視点を拒否したのは明らかである。進化論や機能主

義が主流を成していた人類学の帝国主義的特性を排除した視点が、鹿野特有の人類学であったことを自覚しなければ、私たちは鹿野の真価を見失ってしまう。誰もが南方共栄圏の要求する「南方」を主題にして没頭していた時、鹿野の眼は南方から「東南亞細亞」に向かっていた〔鹿野 1944.6.28〕。地理的な意味での南方から東南アジアに移動したのではなく、思想的な意味での移動であると理解できる。地理的には同一の領域に対して、心性地図（mental map）上の移動を意味する。侵略的な「南方」という用語からの離脱を求める「東南亞細亞」という用語の駆使が志向するのは、一種の隠抗策であると言いたい。用語の象徴を利用した、最小限の学者的抵抗を試みたのが鹿野の立場であった。場所と心性の象徴的な重畳性を試みた鹿野の思想移動は、最終的に侵略的戦争に対する抵抗の一種であったと言える。鹿野の思想移動がさらに際立つ点は、東南アジアの向こうにある「ポリネシア」〔鹿野 1944.6.5〕に向かっていたという点である。抵抗という、政治性を克服した学者的態度を堅持した鹿野の思想移動は、真の学問を志向していたことを実践で示したものである。後日、鹿野の思想移動を追跡していたイネズ・ドゥ・ボークレールによって、台湾ー東南アジアーポリネシアを連結する文化移動路を追求する試みが継承されている。彼女が鹿野の行方に関心を見せた趣旨は、同一の学問的関心の穿鑿過程に始まったものであることがわかる。

私は、鹿野のこのような立場や視点を脱他者化（de-otherization）と命名しようと思う。他者化に関する問題意識に透徹した鹿野であったからこそ、土地問題をめぐる原住民の立場を理解することができたし、総督府の霧社事件の処理方針について反駁文を作成したのである。植民地台湾で経験していた脱他者化の認識は、大東亜戦争中の占領地でも変わらず適用され、行動に表れた。フィリピンのマニラでは陸軍から受けたフィリピン博物館の収集品を日本に移送するという命令を履行せず（命令書は未確認であり、バイヤー教授の孫の証言による）、「比島先史研究所」を設立し、オトリー・バイヤー教授を助け、彼の収集品を現地で保護する努力をした。そして自分も研究に没頭した。後日、國分が鹿野の名前で発刊されていた図譜を（紅頭嶼の）村長に見せた〔國分・三木 1963.9.12b: 30〕という事実は、住民の立場を優先して考慮した人類学者の態度である。研究作業の過程から研究結果の出版物に至るまで、研究対象であった住民を優先して考えることが、少なくとも他者化の枠から抜け出そうと試みることだったと考えられる。紅頭嶼のヤミ族を、野蛮人という視点で見なかったことを物証で表すことで、研究者と研究対象の住民が互いに疎通する場を用意できるだけでなく、出版された民族誌の主人公らに最低限の配慮を提供しようとする態度である。國分は、鹿野の代わりにこの全ての行為を実践したのだと思われる。

彼（筆者注：鹿野）は、……ボルネオに入りました。ボルネオ島のサラワクにあるサラワク博物館のトム・ハリソンと連携をとるためだったと思います。そのころ既にトム・

ハリソンは現地ですべて原住民を組織して反日抗戦の地下に潜ってしまっていたんですね。ですから、きわめて悪い状況でした。そして鹿野さんは、終戦と同時に原住民のいる奥地に入ったという消息だけを残り、そのまま消えてしまったんです。熊野民俗の研究をやっている若い友人と山に入って、そのまま消息が絶えました。われわれは、彼のことだからそのうち帰ってくるだろうと思っておりました。けれども、一九六一年にホノルルのハワイ大学で国際学会があり、学会のエクスカージョンで海岸の洞窟画のようなものを見に行った時、海岸の珊瑚礁の上に座って弁当を開いていたら、ある婦人が近寄ってきたのです。ボークレーというウィーン系の民族学者で、「あなたはミスター・カノの親友のコクブだろう。あなたはカノのことを知っているか」と聞くのです。それで、何か消息をご存じでしょうか、と尋ねたら、小さな声で、鹿野が失踪したのは日本の憲兵がからんでいる、これが英国の学会ではもつばらの噂だ、と言うのです。僕は非常に驚きました。鹿野さんの奥さんが日本にいるということはすっかり失念してしまい、ボークレーさんに聞いたことを『月刊太陽』（第四号、一九六三年、平凡社）に書いたのです。

[安溪・平川編 2006.3.16: 244-245; 國分・三木 1963.9.12a]

國分の証言に登場するサラワク博物館のキュレーターの名前は、トム・ハリソン (Tom Harrison) ではなく、エドワード・バンクスに変更しなくてはならない<sup>8)</sup>。鹿野がサラワク

8) 「日本軍が 1941 年 12 月 24 日にクチンを陥落させ、3 年 8 カ月間支配した。クチンから東南に 3 マイルの地点に Batu Lintang 収容所を設置した」[Ooi 1998: 6]。そして、「(1941 年) 12 月 24 日, 06:00 現在の各機関担当者現況表には 'Banks, E. Curator, Sarawak Museum, Kuching」[Ooi 1998: 106] と記録されている。つまり、日本軍がボルネオを侵攻した当時、サラワク博物館のキュレーターは Edward Banks (1903-1988) であったことに間違いなく、彼はパトゥ・リントン収容所に収監された。後日、北ボルネオに司政官として着任した土方久功は、バンクスに会ったに違いない。土方が疾病により大阪の病院に送られた後、後任は一時期空席であったが、1944 年 5 月に鹿野が赴任した。彼がサラワク博物館のキュレーターであったバンクスに会ったと考えるのは、無理ではない。一方、「連合軍のサラワク地域への爆撃は、1944 年 11 月から始まった」[Ooi 1998: 279]。「米軍飛行機がボルネオに 1945 年 1 月 12 日に墜落し、操縦士である Smith 中尉を救出する作戦」[Harrison 1947.7.2: 117] があり、「1945 年 2 月に下達された作戦名は 'Z' Special であった」[Heimann 1997: 176]。「作戦任務のための最終説明が 1945 年 3 月 15 日にあり、トム・ハリソンと彼の部下たちは、オーストラリアのダーウィンを経てフィリピンのミンドロ島にあるモロタイに移動した。モロタイで彼のチームに SEMUT1 (semut はマレー語で蟻という意味) という名称が与えられ、彼らは一週間後に落下傘で北ボルネオの落下地点に到着した」[Harrison 1959: 175]。つまり、ハリソンが北ボルネオに到着したのは、1945 年 3 月下旬だと言える。ハリソンは、「バンクスに会った時、衰弱していた」[Harrison 1959: 184] と記述している。「ハリソンが、中北部のサラワクからダッチボルネオに繋がるカラピ族が居住する山岳地帯を初めて訪問したのは、1945 年 3 月で、1946 年 7 月までそこに滞留した」[Harrison 1950: 201]。さらに、ハリソンに「Curator of the Museum and Government Ethnologist」[Harrison 1947.8.1: 145] という肩書が付与された出版物が登場する最初の時期は、1947 年 8 月である。以上の記録を検討した結果、私は次のような結論を下した。鹿野がサラワク博物館に到着したのは 1944 年 5 月であり、トム・ハリソンが特殊部隊の指揮官として北

でエドワード・バンクスとの提携を模索したはずだという予測は、マニラでのオトリー・ベイヤー教授との協力と同じ脈絡である。「日本軍がサラワク博物館を積極的に破壊しなかった点について感謝せねばならない。彼らは一時、所蔵品の内、相当量を持って行くために梱包したが、結果的にほとんど移動されなかった」[Harrison 1947.10.1: 189] というハリソンの報告に注目したい。同じ現象がフィリピンでも見られたことを指摘するならば、当時サラワク博物館にいた鹿野の役割について、再度熟考すべき課題が与えられる。大東亜戦争中、帝国日本の軍当局の立場で見ると、このような提携や協力は、部分的にでも敵との内通及び利敵行為という嫌疑が適用される可能性を排除できない。陸軍の命令書一枚で戦争に追い立てられた自由主義者の鹿野にとって、北ボルネオの陸軍嘱託職は、暴力的な抑圧と変わらなかっただろう。占領地で軍当局の命令を遂行しなくてはならない陸軍嘱託であった鹿野の活動が、軍当局が要求する思想よりも学問の精進を優先する思想に偏っていたことがわかるくだけである<sup>9)</sup>。

鹿野の名前で発表された論文を一瞥してみると、彼が広げていた学問的好奇心の空間移動は、シベリア [鹿野 1936.12.1] からポリネシア [鹿野 1944.6.5] に至る。その中でも重点的に関心を集中させた場所が、台湾と東南アジアである。台湾の紅頭嶼は鹿野学の出発点であり、核心であると言える。紅頭嶼は鹿野学の故郷であり、鹿野は紅頭嶼で全方位に学問的な関心の移動を展開した。昆虫学、博物学、動物学、鳥類学、氷河学、地理学、先史学（史前学）、人口学、人類学、民族学などへと拡張していった学問的好奇心は、東京帝国大学地理学科では満足できなかっただけでなく、最終的には自分を大東亜戦争の戦場である北ボルネオで「行方不明」にさせる運命に導いた。彼がマニラに8カ月間滞在しながら、オトリー・ベイヤーと共に「比島先史研究所」を設立運営していたことを念頭に置けば、北ボルネオでの1年余りの期間に彼のノートに集積されたはずの、学問的な情報や資料について考えざるを得ない。彼の学問的な好奇心は、戦場だからといって縮こまらず、むしろ戦場を機会と捉え、関心の空間移動を拡張し、深層化した。彼がマニラでオトリー・ベイヤーと交流していた経

---

ボルネオに落下傘を利用して着陸した時期は、1945年3月下旬である。従って、鹿野がサラワク博物館で会った博物館キュレーターは、トム・ハリソンではなく、エドワード・バンクスである。戦後有名になったトム・ハリソンの英雄譚に魅了された國分直一が、戦争という状況で発生した複雑な状況について詳細な資料分析を行わない状態で、サラワク博物館のキュレーターを誤認したものと思われる。

- 9) 「北(蘭領)ボルネオ占領後の昭和17年4月ボルネオ守備軍が編成され、クチン(のちゼッセルトンへ)に司令部を置き、司令部内に軍政部本部を設け……昭和17年7月南方軍軍政總監部が編成された時、各占領地に軍政監部を置いたが、北ボルネオには特に軍政監部を置かず、従来の軍政部のまま軍政を継続した。17年9月末に作成されたボルネオ守備軍司令部編制によると、軍政部には総務部(軍高級参謀の兼任)、警務部(憲兵)のほか、交通・産業・財政・調査各部、外局として海事局・通信局を置いた。19年9月戦局の緊迫化により、ボルネオ守備軍は第37軍に改編され、軍政組織は軍隊化した」[秦 1981: 418]。

緯や結果を考えれば、北ボルネオで鹿野は明らかにクチンにあったサラワク博物館のキュレーターであったエドワード・バンクスを訪ねたはずである。

「ボルネオ研究においては、従来總ての研究が民族學的興味の儘に山住の特殊民族の考察に主點をおけるに反し、むしろ能力利用の點よりして、海岸住民たる開化マライの實情研究に主力を注いだ……」[國策研究會 1943.12.15: 285-287]。国策に合わせて、占領地であるボルネオに関する紹介目的のために、C. ホーゼ (Hose, Charles) と W. マクドーガル (McDougall, William) による『ボルネオ原住民の研究』が翻訳出版された。また、H. ベルナツィーク (Hugo A. Bernatzik) 編纂の *Die Grosse Völkerkunde* より、大東亜に関する部分だけを翻訳して『大東亜の原住民族』と題して出版された本の中でも、ボルネオが紹介された。日本拓殖協会で縁を結んだ第二高教授であるこの本の翻訳者佐藤莊一郎は、翻訳の過程で鹿野忠雄に世話になったと書いている [佐藤 1943.10.5: 4]。このような国策という意志の延長線上で、後日、鹿野と金子がボルネオに派遣されたことが理解できるし、1945年2月には、ボルネオのバリト川上流のムルンと中下流域諸族の元へ、マカッサル研究所の高主武三が訪れている [日本人類学会編 1955.7.15: 2-3]。鹿野のボルネオ行きのための「調査要員の辞令は、昭和十九年三月二十二日付で発令された。辞令には「陸軍専任囑託」と記され、奏任官待遇であった。発令者は、内閣となっている……鹿野は奏任官待遇といっても陸軍大佐相当であったというから、高等官三等であり、経歴からいっても異例の待遇である。……高等官三等は調査を円滑に行うためにも、まず申し分のない待遇」[山崎 1992: 245-246] だったという。ボルネオ滞在中の鹿野の行跡については、一点の文書も見つけることができない状況である。

### 3 帝国日本が輩出した世界的人類学者鹿野忠雄

システム全体が漂流する帝国の中で、鹿野は漂流していなかった。彼は、自分の意志通りに学問に向かって移動していた。結果的に彼は、分野移動を開拓することで制度的不適応を経験し、思想移動を試みることで体制への不適応という混乱に陥るほかなかった。逆説的に言えば、それほど困難な学問の環境が、鹿野学や鹿野の人類学を誕生させた背景であるといえる。逆機能的であるか順機能的であるかに関係なく、鹿野を人類学者として成長させた背景は、帝国日本である。これが、日本人類学史において鹿野を排除できない根源的な理由である。戦前の世代が主要な舞台から退き、戦後世代が日本社会の主流を成すようになり、鹿野に関する記憶は薄れつつある。鹿野に対する過去の評価は、鹿野を直接経験していた人々の記憶の中で行われたが、彼に対する現在の評価喪失という現象は、関心不足に起因していることがわかる。日本人類学史を整理した最近の業績が鹿野を度外視している現象は、オトリリー・ベイヤー教授やイネズ・ドゥ・ボークレール博士の鹿野に対する評価と、極端な対照を成している。鹿野の業績について両極端に表れた評価は、明らかにどちらか片方が誤って

いるという点を十分指摘できる。鹿野に対する評価の不在を示す記録は引用できないが、鹿野に対する好評の記録は引用が可能である。

フィリピン人類学の先駆者であったバイヤー教授 [Zamora ed. 1967] は、「台湾に関する代表的な研究者名簿に N. Utsurikawa, Erin Asai, Tadao Kano を挙げ、Samasama Island (Kasho-do) の研究者としては Tadao Kano, Botel Tobago (Koto-sho) の研究者としては Erin Asai, R. Torii, Tadao Kano」と言及し、「鹿野博士の見解、特に東南アジアの考古学と比較民族誌に関する基礎的資料の解釈に関して、尊敬せざる得なかった」[Beyer 1952.9.15: vii] と吐露した。

戦後、台湾の中央研究院民族学研究所に長期間勤務していたイネズ・ドゥ・ボークレール (鮑克蘭) は、1956年12月3日から1957年2月14日まで紅頭嶼に滞在した。Imurud 村に主に居住しながら、Imurud (紅頭)、Irarumiruk (東清)、Iraralai (朗島)、Yayu (椰油)、Iratani (漁人)、Ivarinu (野銀) の6つの地域に関する資料を収集した。この論文でボークレールが鹿野 [1944]<sup>10</sup> を引用し、紅頭嶼に出自集団としての竹出自 (bamboo descent) と石出自 (stone descent) の大別があることを指摘している [Beauclair 1957: 105]。鹿野の研究が、社会組織である親族問題をとりあげて論じたという点を明らかにすることが重要である。この問題は後日、東南アジアの島嶼地域の双方向的親族 (bilateral kinship) を論じているロドニー・ニーダムに繋がる可能性のある問題である。親族用語が身体部分の用語を基盤とする類似性が、フィリピンやボルネオで発見された点に着眼したニーダムの社会人類学は、フィリピンのタガログ語にも及んでいることがロバート・フォックスによっても確認された [Beauclair 1959c: 107 脚注3]。同一の内容がヤミやバタンでも発見されていることを考える時、ヤミ族の研究を通じた鹿野の出自問題に関する関心は、ニーダムやフォックスの研究より先行していたという点を指摘しなくてはならない。戦時中、フィリピンやボルネオで長期滞在していた鹿野の親族研究が、世間の注目を受けられず未完に終わった可能性を仮定できる。今後、東南アジアの島嶼地域の社会人類学という主題は、鹿野を排除することはできないということを想起させようと思う。つまるところ、鹿野の紅頭嶼ヤミ族の研究は、東南アジアの島嶼地域の親族研究に先行する作業に該当するという点に注目する必要がある。

さらに進んでボークレールは、鹿野の研究報告を北ボルネオの武器類と比較言及し [Beauclair 1958: 97]、口伝資料に基づいたヤミとバタンの文化交流に関して、鹿野の研究の重要性を明らかにしている [Beauclair 1959c: 116]。また、文化交流という視点に基づいた、鹿野の1941年度の甕棺葬に関する論文を引用し、甕棺葬の分布を、インドネシアーフィリピンーバブヤンーバタンーヤミー台湾ー日本ー韓国まで連結するものと把握してい

10) 1944.5.30「紅頭嶼ヤミ族と飛魚、附比律賓バタン諸島の飛魚漁」『太平洋圏——民族と文化(上)』(平野義太郎(編), 503-573ページ, 東京:河出書房)を指す。

る [Beauclair 1972: 172]。彼女はまた、ボテル・トバゴ (Botel Tobago 紅頭嶼) の6つの村、すなわち西側の海岸の3つ (Imurud, Iratai, Yayu)、北側の海岸の Iraralai、東側の海岸の Irarumiruk, Ivarinu を踏査 [Beauclair 1959b: 189] したが、その論文には鹿野の論文が多く引用されており、マリノフスキーのメラネシアのクラ研究と比較して説明されている。ボークレールによって、鹿野の研究が西洋の人類学界と繋がっていることに注目する必要がある、鹿野の研究が日本に限定された閉鎖的な空気を脱していたことは、今後の鹿野人類学の展開方向を示唆するものである。ただ、ボークレール以外は誰も親族問題に対する鹿野の関心を指摘しなかったという点が残念である。以上の点から、鹿野は日本の学界で忘れられた学者だと言わざるを得ないし、ボークレールの貢献についても、今後再発見の作業が必要であると思う。

「ヤミ族は、人称冠詞「シ」を人名の前につける。鹿野さんもはじめ「シカノサン」と呼ばれたことがある」[國分・三木 1963.9.12b: 32]。ヤミ族の人々が鹿野を自分たちの用語法で呼称したという点は、ヤミ族の人々と鹿野の間の互恵的関係を立証するのに十分であり、ヤミ族の人々が鹿野をヤミ族の社会的関係の中で認識していたことを物語っている。「鹿野さんほど、ヤミの心に強烈な印象を残している人は少なからう。1927年から37年にかけて渡島すること10度、滞在日数通算340日、ほとんど1年間の全季節にわたって……ヤミ族にとっては忘れられない日本人になってしまったのであろう」[國分・三木 1963.9.12b: 32]。人類学者のフィールドワークが、住民たちとの関係設定にどの程度まで深く沈潜すべきかを示してくれるモデルとして、鹿野の紅頭嶼研究を考えたい。彼のヤミ族研究の実践事例は、世界の人類学史上の長期連続研究 (longitudinal research) のモデルとして考慮されるに十分であり、人類学的方法論上、長期連続研究を行った最初の事例として記録されねばならない。マリノフスキーの学問的故郷がトロブリアンドであるなら、鹿野の人類学的故郷は紅頭嶼のヤミ族となる。國分が鹿野を「偉大なエスノグラファー」と呼んでいた理由がここにあり、今私たちが鹿野によるヤミ族の民族誌を改めて読まなくてはならない理由もここにある。

#### IV 結語——真正の鏡

帝国政治は、真正の学問を許容しなかつただけでなく、学問に邁進していた学者の生命まで奪ってしまった。帝国日本の政治性は、敗戦で凍結された過去形ではなく、敗戦によって続いた「行方不明」の現在形として存在する。「極東 (Far Eastern) の考古学や民族学の分野は、最も能力があり、情熱的で、学問に献身的であった学者一人を失い」[Beyer 1952: v]、帝国は「偉大なエスノグラファー」[國分 1986] を敗戦の戦場に遺棄した。大東亜戦争中の棄民政策が、公式的にまだ終結していないことを証言しているのが、鹿野忠雄と金子總平

の二人の学者の行方不明の事例であるといえる。「鹿野忠雄（1945 没）は、戦前における民族学と地理学の関連を身を以って代表する存在であった……鹿野の悲劇をもって戦前の時期は幕を閉じ、今日が開幕される」[小川 1966: 111] という希望的な余韻を残しているが、私はそのようには思わない。「戦前の悲劇」の想像上の閉幕は、今日の開幕の悲劇的な種でしかない。少なくとも鹿野の場合に照らして見れば、日本人類学史の今日の開幕は、戦前の悲劇を担保としている。鹿野はボルネオのジャングルの中で沈黙させられたが、鹿野学は、東アジア空間において現在進行形で証言している。その証言を聴ける方法を模索し、証言録を作ることが、学史を勉強する後進の使命である。遮断された死者の記憶は、生き残った者によって再生されるのを待っている。遮断という現象は、真実を隠蔽したり埋没させたり忘却させようということである。しかし、記憶は遮断されない。真実を知ろうとする人が現れるのを待つ、死者の記憶が存在するだけである。

遺産は、後世の継承努力によって意味を持つようになる。鹿野の学問の展開過程は、それ自体が日本人類学の遺産であり、東アジア人類学の未来でもある。第2次世界大戦の終戦直後、学問の混乱状態にあった台湾や日本において、最も先に膺炙された対象が、鹿野の業績であったことに注目しなくてはならない。当時の「鹿野再発見」の努力が意味するのは、厳然たる時代的要請の結果であったと指摘したい。学問の混乱状態の飢えを解消し、精神的な支柱の役割を果たせる対象として、鹿野が選択されたのである。戦後、人類学という学問の持続のための滋養分が鹿野から提供されたことに対する意味の付与は、決して大げさなことではない。日本人類学のみならず、東アジア人類学という枠組みで「戦後 70 年」を回顧する時、真っ先に浮かぶのが鹿野忠雄である。なぜなら、戦後 70 年の始発点であった混乱期に、人類学分野における学問的支柱の役割を担ったのが鹿野であったからである。戦後 70 年の日本人類学が、占領軍である GHQ による強制的な再編を経験する過程において、鹿野に対する一抹の関心は、日本人類学の自生的な表現の発露だったと思われる。台湾や日本で、戦後 70 年の人類学が再出発する始発点において鹿野が論じられたという点に注目できるし、アイロニカルにも、死者（鹿野忠雄）が生者（戦後の台湾学界と日本学界でそれぞれ別に）の学問的関係を媒介する繋ぎ役を果たした点も指摘しないわけにはいかない。戦争や占領という狂風の中で命脈を継いで来た鹿野学の意味を再発見し、それを灯台の明かりに見立てて、未来の東アジア人類学を開拓したいというのが筆者の希望である。

分野移動に始まった制度的な不適応や思想移動が招いた体制的な不適応の複合性は、鹿野の運命に致命的な結果を招来する契機となった可能性が高い。植民政策の問題点を見つめる眼差しにおいても、鹿野は先駆的な声を提し、戦時期に占領者の管理の問題を指摘するに当たっても、鹿野はためらわず批判の文章を披瀝した。既得権が保証された制度や、制度権力に対する抵抗意識が、鹿野学の基本精神であるといえる。植民地や占領地で、人生を蹂躪さ

れた人々の立場に立っていた鹿野の、人類学的な位置を改めて考える。彼は、帝国日本で自生的に誕生したヒューマニズムを持った人類学者として評価されても遜色がなく、彼のヒューマニズムは、マリノフスキーが体得していた視点である *native's point of view* と同じ線上に基づいている。このような視点は、鹿野がフィールドで共に生活していた人々との関係の中で、自ら学んだものだといえる。マリノフスキーがトロブリアンドで創案していた視点が、鹿野が紅頭嶼のヤミで体得した視点と相通じており、これが人類学者が方法論上の鏡とすべき最終的な目標であろう。そのような点で鹿野は、日本の学界が輩出していた真正の人類学者の一人であったと評価されてもまったく大げさではない。1927年、ヤミ族と対面した最初の時期から、初志一貫して持続していた鹿野の学問的立場をひとことで表すならば、それは他者化を徹底して排撃していた脱他者化の視点である。植民母国出身あるいは占領軍という立場では、決して容易ではない立場の選択であった。このような彼の学問的態度は、霧社事件に関する台湾総督府の政策に対する批判にも繋がり、後日、大東亜戦争勃発後、日本軍が占領していたフィリピンのマニラでも続いていたことが確認されているが、ボルネオではいかなる姿で続いていたのだろうか？ 1920年代、マリノフスキーによって提起された *native's point of view* を、ほぼ同時期に台湾で実践していた鹿野の人類学的視点は、当代の世界の人類学界でも至極珍しい現象であった。鹿野が「他者化」という単語を使用したことはなかったが、鹿野学の視点は明らかに他者化を排撃していることを指摘したい。それは、当代の帝国日本ではなかなか見られない現象であった。他者化の問題点を意識し、徹底して排撃しようとした鹿野の人類学的態度は、現代人類学の基礎を築くのに十分であった。したがって、鹿野学から日本人類学のオリジナリティを発見できると考えるのが、私の信念である。問題は、彼の視点をきちんと継承できずにいる後進たちにある。

鹿野忠雄が活動していた地域は、帝国日本の植民地経営及び戦争遂行と緊密な関連性を見せる東アジアである。その東アジアは、「大東亜共栄圏」という一つのイデオロギー的な価値で収斂されるものではなく、具体的な各社会の生が営まれている多様な民族誌の場として表現することが、人類学者の課業である。脱他者化と制度権力に対する抵抗意識を主軸とした鹿野学に基づくならば、台湾や紅頭嶼、そしてフィリピンや北ボルネオまで延びてゆく彼の民族誌や足跡が示す方向は、東アジア人類学研究の新たな地平と視点を提供してくれる。GHQによる日本占領期間に、鹿野の著書が二冊出版された。上巻と下巻に分けて発刊された「東南亞細亞」に関連するこの本は、当代まで発行された日本人類学関連書の中で最も独創的で、他に抜きん出た研究業績の成果だと評価したい。戦争で生き残った者が力を合わせて行方不明になった鹿野のために作ったものであるが、鹿野の業績を通して自分たちを治癒し慰めたり、照らし合わせられる鏡として用意したものだと思われる。つまり、死者が生者のために用意したプレゼントになるわけである。

最後の蛇足として、戦後70年に臨み、筆者は一つの希望を提案したいと思う。「1953年、ManilaのFar Eastern Prehistoric Congressに鹿野が参加してくれることを、切に願うだけだ」[Beyer 1952.9.15: viii]。ベイヤー教授のこの希望が響き、サラワクで1945年の夏に行方不明となった人類学者鹿野忠雄と金子總平の足跡を迎える調査委員会が構成されることを願う。行方不明地であるボルネオ行きのための「陸軍専任囑託」の発令者が内閣であったため、この問題に対して学界は、これ以上沈黙してはならない。国民である行方不明兵MIAに対する最終責任は、当該国家にあるのである。

## 謝 辞

本稿の作成には、多くの方の協力があつた。この紙面を借りて感謝する。植野弘子教授（東洋大）、伊藤亜人教授（東京大）、西澤弘恵先生（東京大）、安溪遊地教授（山口県立大）、Henry O. Beyer氏、Cynthia Neri Zayas教授（University of the Philippines, Diliman）、Analyn V. Salavador-Amores教授（University of the Philippines, Baguio）、金廣植氏（東京学芸大学博士）、曾詩穎氏（國立臺灣大學中央圖書館）、臺灣中央研究院民族學研究所、国立民族学博物館図書室、日本語翻訳を担当した金良淑氏にも。

## 参 考 文 献

[日本語文献]

綾部恒雄（編）

1988.12.10『文化人類学群像（3日本編）』京都：アカデミア出版会。

安溪遊地・平川敬治編

2006.3.16『遠い空——國分直一、人と学問』福岡：海鳥社。

鹿野忠雄（附録要参照）

國策研究會

1943.12.15『南方諸民族事情研究』東京：日本評論社。

國分直一

1952.11.30「フィリッピン考古学とその太平洋諸島人種起源に対する関係」、『鹿児島県考古学会紀要』2: 17-28。

1986「偉大なエスノグラフファー鹿野忠雄氏をめぐって」、『海上の道——倭と倭的世界の摸索』國分直一、東京：福武書店。

國分直一（文）・三木淳（写）

1963.9.12a 「海の高砂族——バシー海峡の孤島：紅頭嶼」、『太陽』10(4):5-28.

1963.9.12b 「赤虫島紳士録——ヤミ族綺談」、『太陽』10(4): 29-35.

大林太良・山田隆治

1966 「歴史民族学」『日本民族学の回顧と展望』日本民族学会（編），1-26 ページ，東京：民族学振興会.

小川徹

1966 「地理学」『日本民族学の回顧と展望』日本民族学会（編），109-113 ページ，東京：民族学振興会.

坂野徹

2005 『帝国日本と人類学者』東京：勁草書店.

佐藤莊一郎

1943.10.5 「譯後偶感」『大東亜の原住民族』ベルナツィーク, H., 3-4 ページ, 東京:岡倉書房.

全京秀

2014.3.30 「植民地台湾における金閨丈夫の再評価」『日本とはなにか——日本民族学の二〇世紀』ヨーゼフ・クライナー（編），296-347 ページ，東京：東京堂出版.

臺灣總督府（編）

1936 『臺灣總督府及所屬官署 職員録』臺北：臺灣時報發行所.

高田保馬

1942.3 『民族論』東京：岩波書店.

1944.2.21 「創刊の辭」『民族研究所紀要』1: 1-2.

中生勝美

2016.3.20 『近代日本の人類学史』東京：風響社.

日本人類学会（編）

1955.7.15 『人類学の概観（1940-1945）』東京：日本学術振興会.

野林厚志

2001.2.18 「鹿野忠雄の研究」『台湾原住民研究概覧——日本からの視点』日本順益台湾原住民研究会（編），57-59 ページ，東京：風響社.

秦郁彦

1981 『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』東京：東京大学出版会.

ベルナツィーク, H.

1943.10.5 『大東亜の原住民族』日本拓殖協会（編訳），東京：岡倉書房（Bernatzik, Hugo A. 1939 *Die Grosse Völkerkunde*, Leipzig).

ホーゼ, C.・W. マクドーガル

1944.3.30 『ボルネオ原住民の研究』野口勇（訳），東京：文化研究社（Hose, Charles & William McDougall 1912 *The Pagan Tribes of Borneo: A Description of Their Physical, Moral and Intellectual Condition with Some Discussion of Their Ethnic Relations*. London: McMillan）.

馬淵東一・瀨川孝吉

1952 「編者あとがき」『東南亞細亞民族學先史學研究（下）』鹿野忠雄著，254-257 ページ，東京：矢島書房．

松本潤一郎

1943.5 『戦時社會文化』東京：積善館．

三吉香馬

1937.11.1 「南洋奇聞（一六七）：厦門見物（其三）」，『南洋』23(11): 84-93.

三吉朋十

1942.8.20 『比律賓の土俗』東京：丸善株式會社．

宮岡真央子

2011.8.20 「台湾原住民族研究の継承と展開」『日本の人類学』山路勝彦（編），77-119 ページ，西宮：関西学院大学出版会．

宮本延人

1941.6 「東亞共榮圏と民族」『國際文化』14: 10-12.

1949.6 「戦後の臺灣民族學界を省みて」『民族學研究』13(4): 115-118.

1983 「旧台北帝国大学時代の雜談記」『貝塚』32: 3-26.

山崎柄根

1974 「鹿野忠雄博士(1906-1945)の生涯と業績」『埼玉大学紀要』教育学部（数学・自然科学），22 卷．

1988.12.10 「鹿野忠雄——比較文化史に示した高い視点」『文化人類学群像（3 日本編）』綾部恒雄（編），353-372 ページ，京都：アカデミア出版会．

1992 『鹿野忠雄——臺灣に魅せられたナチュラリスト』東京：平凡社．

2001.3.31 「鹿野忠雄著作目録補遺」『台湾原住民研究』5: 201-204.

山路勝彦

2011.8.20 「日本人類学の歴史的展開」『日本の人類学』山路勝彦（編），9-73 ページ，西宮：関西学院大学出版会．

匿名

1931.2 「霧社事件の顛末」『南方土俗』1(1): 98-115.

[参考資料]

- 『大阪毎日新聞』1933年10月24日18135号。  
『臺灣日日新報』1934年12月23日12474号。  
『帝國大學新聞』1942年5月4日(第899号)1942年7月13日付。

[中国語文献]

宋文薰

- 1950.1.24 「鹿野忠雄著『東南亞細亞民族學先史學研究 I』」『臺灣風土』83: 1.  
1950.2.6 「鹿野忠雄著『東南亞細亞民族學先史學研究 I (続)』」『臺灣風土』85: 1.  
1950.2.27 「鹿野忠雄著『東南亞細亞民族學先史學研究 I (続)』」『臺灣風土』87: 1.  
1950.3.6 「鹿野忠雄著『東南亞細亞民族學先史學研究 I (続)』」『臺灣風土』88: 1.  
1952.3.7 「臺灣綺談」『臺灣風土』152: 1.

吳永華

- 1996.1 『被遺忘の日籍臺灣動物學者』臺中：晨星出版社。

[英語文献]

A.T.S.

- 1965.7 H. Otley Beyer: Dean of Philippine Anthropology, *Philippines International* 9(3): 2-4 & 39.

Beauchair, Inez de

- 1957 Field Notes on Lan Yii (Botel Tobago), *Bulletin of the Institute of Ethnology* 3:101-116.  
1958 Fightings and Weapons of the Yami of Botel Tobago, *Bulletin of the Institute of Ethnology* 5: 87-114.  
1959a Die Religionen der Yami auf Botel Tobago, *Sociologus* 9(I): 1-23.  
1959b Display of Wealth, Gift Exchange and Food Distribution on Botel Tobago, *Bulletin of the Institute of Ethnology* 8:185-210.  
1959c Three Genealogical Stories from Botel Tobago, *Bulletin of the Institute of Ethnology* 7: 105-140.  
1969 Gold and Silver on Botel Tobago: The Silver Helmet of the Yami, *Bulletin of the Institute of Ethnology* 27: 121-128.  
1972 Jar Burial on Botel Tobago Island, *Asian Perspectives* 15: 167-176.

Beyer, H. Otley

- 1947.7-8. Outline Review of Philippine Archaeology by Islands and Provinces, *Philippine Journal of Science* 77(3-4): 205-374.
- 1952.9.15 An Appreciation of the Work and Views of Tadao Kano, 『東南亞細亞民族學先史學研究(下)』鹿野忠雄, pp. v-viii, 東京; 矢島書房.
- Harrison, Tom
- 1947.7.2 American Airmen Adrift in the Ulu, *Sarawak Gazette* 1072: 117.
- 1947.8.1 Our Museum, *Sarawak Gazette* 1073: 145-146.
- 1947.10.1 The Two Way Jobs of Our Museum, *Sarawak Gazette* 1075: 188-190.
- 1950 (Sept.) Kelabit, Land Dyak and Related Glass Beads in Sarawak, *Sarawak Museum Journal* 17: 201-220.
- 1957(Dec.) Japan and Borneo: Some Ceramic Parallels?, *Sarawak Museum Journal* 25: 100-107.
- 1959 *World Within: A Borneo Story*, London: Cresset Press.
- Heimann, Judith M.
- 1997 *The Most Offending Soul Alive: Tom Harrison and His Remarkable Life*, Honolulu: University of Hawaii Press,
- Kaneko, Erika
- 1981 Inez de Beauclair: 1897-1981, *Asian Perspectives* 24(1): 91-95.
- Kokubu, N.
- 1949.7 Note on the Burial Customs in the Botel Tobago Island (關於紅頭嶼的埋葬樣式), 『臺灣文化』5(1): 45-54.
- Lirazan, Rustom S.
- 1965.7 The Remarkable Beyer Collection, *Philippines International* 9(3): 20-25.
- Malinowski, Bronislaw
- 1929 Practical Anthropology, *Africa* 2(1): 23-38.
- Ooi, Keat Gin
- 1998 *Japanese Empire in the Tropics: Selected Documents and Reports of the Japanese Period in Sarawak, Northwest Borneo, 1941-1945*, 2 vols., Athens, OH: Ohio University Center for International Studies, Monographs in International Studies, Southeast Asia Series No. 101.
- Ravenholt, Albert
- 1964.5 Dr. H. Otley Beyer: Pioneer Scientist on the Frontier in Asia, *Southeast Asia Series* 12(4): 377-389.
- Scott, James

- 1984 *Weapons of the Weak*, New Haven: Yale University Press.  
Segawa, Koichi
- 1956.11.5 Author's Acknowledgements, *The Illustrated Ethnography of Formosan Aborigines (Vol. 1 The Yami)*, Tadao Kano & Koichi Segawa. Tokyo: Maruzen Co.  
Zamora, Mario D., (ed.)
- 1967 *Studies in Philippine Anthropology (In Honor of H. Otley Beyer)*, Quezon City: Alemar-Phoenix.

付録：鹿野忠雄の人類学関連論文目録 (\*の二つは、[山崎 2001] 参考)

- 1927.11.3 「紅頭嶼ヤミ族の人類學的概観」『翔風』4: 129-148.
- 1928.2.20 「蕃人の樂器ロボ」『翔風』5: 99-109.
- 1928.7.1 「ヤミ族の船に就いて」『民族』3(5): 99-110.
- 1928.11.15 「臺灣蕃人の弓に就いて」『翔風』6: 38-40.
- 1929.2.11 「臺灣蕃族巡禮：パイワン族」『翔風』7: 29-45.
- 1929.4.1 「紅頭嶼ヤミ族と動物との關係」『臺灣博物學會會報』101: 190-202.
- 1929.11.30a 「臺灣石器時代遺物發見地名表」『史前學雜誌』1(5): 53-56.
- 1929.11.30b 「紅頭嶼の鶏卵とウナギ」『アミーバ』1(2): 24-25.
- 1929.11.30c 「臺灣ヤミ族蕃人の狩獵生活」『アミーバ』1(2): 26-28.
- 1930.1.15 「紅頭嶼ヤミ族の山羊の崇拜に就いて」『人類學雜誌』45(1): 41-45.
- 1930.3.1 「紅頭嶼ヤミ族の埋葬法に就いて」、『宗教研究』新7(1): 36-38.
- 1930.3.15a 「臺灣石器時代遺物發見地名表(二)」『史前學雜誌』2(2): 61-63.
- 1930.3.15b 「古代風俗研究資料とシテのパイワン族の祖先像に就いて (パイワン族祖先像に關する報文 第一)」『史前學雜誌』2(2): 68-71.
- 1930.3.29a 「蕃人の燈火用植物」『アミーバ』2(1): 4-5.
- 1930.3.29b 「臺灣蕃人の聖鳥シレック」『アミーバ』2(1): 31-33.
- 1930.3.29c 「紅頭嶼ヤミ族とアウムガヒ」『アミーバ』2(1): 45-46.
- 1930.4.15 「紅頭嶼ヤミ族の弓矢に就いて」『人類學雜誌』45(4): 164-166
- 1930.5.15a 「臺灣古代に於ける黒柿用途」『史前學雜誌』2(3): 54
- 1930.5.15b 「紅頭嶼に發見せられたり石器に就いて」『史前學雜誌』2(3):
- 1930.6.15 「臺灣蕃族に青銅器時代存せしか」『人類學雜誌』45(6): 242-245.
- 1930.7.15a 「是川泥炭層出土甲蟲の一種に就いて」『史前學雜誌』2(4): 44-45.
- 1930.7.15b 「臺灣東海岸巨石文化遺蹟に就いて(一)」『人類學雜誌』45(7): 273-285.

- 1930.7.29a 「紅頭嶼蕃人と煙草」『アミーバ』2(2): 14-15.
- 1930.7.29b 「臺灣の蕃人と生姜」『アミーバ』2(2): 17.
- 1930.7.29c 「臺灣産植物著名集(其の一)」『アミーバ』2(2): 78-81.
- 1930.9.15a 「臺灣東海岸巨石文化遺蹟に就いて(二)」『人類學雜誌』45(9): 362-374.
- 1930.9.15b 「臺灣ライブンロク, マチクル社附近の遺跡」『史前學雜誌』2(5): 45-46.
- 1930.11.1-3 「地理學的に見た台湾の蕃人(上中下)」東京朝日新聞 15984, 15986, 15987号\*.
- 1930.11.15 「クヴァラン族の船及び同族とアミ族との關係(一)」『人類學雜誌』45(11): 441-444.
- 1930.12.15 「クヴァラン族の船及び同族とアミ族との關係(二)」『人類學雜誌』45(12): 476-480.
- 1931.7.15 「紅頭嶼蕃の使用する船」『人類學雜誌』46(7): 262-272.
- 1932.1.1 「臺灣蕃人の郷土觀念」『郷土科學』15: 34-39.
- 1932.3.15 「臺灣島に於ける小人居住の傳説」『人類學雜誌』47(3): 103-116.
- 1933.1.1 「臺灣蕃人の狩獵生活」『郷土研究』7(1): 13-35.
- 1934.7.1 「邦土南端の島 紅頭嶼——其の生物と蕃人の生活」『科學知識』14(7): 103-107.
- 1935.11.25 「南海の原始民——邦土の一片 紅頭嶼」都新聞 17255號.
- 1936.12.1 「シベリア東北部の山脈系と氷河問題」『地理學評論』12(12): 1147-1149.
- 1937.12.12 「臺灣原住民族の人口密度分布竝に高度分布(講演要旨)」『地理學評論』13(12): 84-85.
- 1938.4.15 「紅頭嶼ヤミ族の大船建造と船祭」『人類學雜誌』53(4): 125-146.
- 1938.8.1 「臺灣原住民族の人口密度分布竝に高度分布に関する調査」『地理學評論』14(8): 1-19.
- 1938.9.1 「臺灣原住民族の人口密度分布竝に高度分布に関する調査(續)」『地理學評論』14(9): 31-66.
- 1938.9.10 「紅頭嶼ヤミ族の粟に関する農耕儀禮」『民族學研究』4(3): 35-48.
- 1939.2.17 「紅頭嶼ヤミ族の出産に関する風習」『南方土俗』5(3.4): 6-17.
- 1939.9 「臺灣原住民族人口の水平的並に垂直的分布」『拓殖獎勵館季報』1(2): 29-74.
- 1939.11.14 「ボルネオ」『外南洋I』(世界地理第六卷), 271-311 ページ, 東京: 河出書房.
- 1940.7.25 「臺灣原住民の新分類(豫報)」『日本拓殖協會季報』2(1): 1-33.
- 1940.10 「支那の諸民族」『支那地理大系(自然環境編)』渡辺光(編), 391-409 ページ, 東京: 日本評論社.

- 1940.11.1 「フィリピン諸島・バタン諸島・紅頭嶼・臺灣民族移動線」『新亞細亞』  
2(11): 26-36.
- 1941.1.25 「紅頭嶼ヤミ族の土器製作」『人類學雜誌』56(1): 41-49.
- 1941.3.18 「最近十年間に於ける臺灣原住民の移住と人口分布變化」『日本拓殖協會季報』  
2(4): 27-39.
- 1941.3.25 「紅頭嶼發見の甕棺，東南亞細亞甕棺埋葬に關する考察」『人類學雜誌』56(3):  
117-135.
- 1941.4.30 「臺灣原住民族の分類に對する一試案」『民族學研究』7(1): 1-32.
- 1941.8.25 「動植物名より見たる紅頭嶼とバタン諸島との類縁關係」『人類學雜誌』56(8):  
434-446.
- 1941.9.25 「フィリピン諸島，紅頭嶼並に臺灣の原住民族に於ける金文化」『人類學雜誌』  
56(9): 465-478.
- 1941.10.16 「臺灣原住民族に於ける漢族影響の地域的差異」『拓殖論叢』3(2): 79-104.
- 1940.1.1 「臺灣原住民族に於ける漢族影響の地理的分布（講演要旨）」『地理學評論』  
16(1): 70.
- 1941.10.25 「臺灣原住民族に於ける數種栽培植物と臺灣原住民族史との關聯」『人類學雜  
誌』56(10): 522-528.
- 1942.1.25 「臺灣東海岸の火燒島に於ける先史學的豫察」『人類學雜誌』57(1): 10-34.
- 1942.2.25 「紅頭嶼の石器とヤミ族」『人類學雜誌』57(2): 85-98.
- 1942.3.5 「臺灣原住民族の人類地理學的研究序説」『地理學研究』1(3): 1-12.
- 1942.3.25 「臺灣原住民族の生皮搔取具と片刃石斧の用途」『人類學雜誌』57(3): 123-  
131.
- 1942.5 「フィリピンとボルネオの山々」『山と溪谷』73: 48-51.
- 1943.3.31 「臺灣に於ける本島人の出身地別人口分布に關する調査」『拓殖論叢』4(3):  
1-53.
- 1943.7.10 「回教徒モロ族と其の統治」『拓殖論叢』4(4): 1-22.
- 1943.10.5 「インドネシアに於ける穀類，特に稻粟耕作の先後の問題」『民族學研究 新』  
1(10): 1-16.
- 1943.11.25 「アノボ族の介製稻穗摘具——附，東南亞細亞の介製稻穗摘具と石包丁との關  
聯」『人類學雜誌』58(11): 431-433.
- 1944.5.28 「紅頭嶼に於けるアウム介製二種の身飾品 並に夫れ等のモチーフの起源」『人  
類學雜誌』59(5): 153-155.
- 1944.5.30 「紅頭嶼ヤミ族と飛魚，附 比律賓バタン諸島の飛魚漁」『太平洋圈——民族と

- 文化(上)』平野義太郎(編), 503-573 ページ, 東京:河出書房.
- 1944.6.5 「ポリネシアの所謂柄附石斧と其の起源」『民族學研究 新』2(6): 1-32.
- 1944.6.28 「東南亞細亞の所謂除草具に就いて」『人類學雜誌』59(6): 205-208.
- 1944.11 「台湾先史時代の文化層」『學海』1(6): 41-46\*.
- 1945.4.20 *The Illustrated Ethnography of Formosan Aborigines*, Tadao Kano & Koichi Segawa, Tokyo: Seikatsusha.
- 1945.11.5 「東南亞細亞に於ける黒陶, 彩陶竝に紅陶: 金關博士の論文を讀みて」『東洋史研究』9(3): 142-151.
- 1946.10.15 『東南亞細亞民族學先史學研究』東京: 矢島書房.
- 1952.9.15 『東南亞細亞民族學先史學研究(下)』東京: 矢島書房.
- 1956.11.5 *The Illustrated Ethnography of Formosan Aborigines (Vol. 1 The Yami)*, Tadao Kano & Koichi Segawa. Tokyo: Maruzen.co.

全：鹿野忠雄の学問の展開過程から学ぶ「移動」と帝国日本